夜を駆ける～Ｈｅｌｌｏ ｍｙ ｆriend～

伊吹ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜を駆ける～Ｈｅｌｌｏ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ～

【Ｎコード】
Ｎ８６６９Ｗ

【作者名】
伊吹ノア

【あらすじ】
未来の可能性の一つ、幻想の世界『ユーライジア』。その世界の中心、『ユーライジア・スクール』。そこで暮らすカズ・カムラルは、スクールの最小学級、『リトクラス』に通う魔法使いの卵だ。そんなカズはある日、隣の席の少年、マーサー・ヴァーレストに誘われ、街で働くこととなる。だがそれは、魔法のマントと仮面つき＆夜限定の仕事で……。
／／現代っぽいアイテムや名称が出てくるかもしれない、異世界ファンタジーです。自身にすらひた隠す秘密を持つ、後に『世界の至

宝』と呼ばれることとなる『カズ』の物語。ある意味勘違い系で、微バトル&冒険要素ありです。個人的には恋愛要素もあるかなと思ってます。／／

1、ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

伊吹ノアですー。
第１１作目、『夜を駆ける～Ｈｅｌｌｏ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ～』をお送りいたします。
一言でいえば、自作の中で最も重要で愛すべきキャラの数多ある物語のほんの一幕、といったところでしょうか。
その分、今までのを踏み台にしつつ気合い入れていきますよー。

1、prologue

そこは未来の可能性の一つである世界、『ユーライジア』。
包み込む暖かい太陽と、深遠なる闇夜照らす月を称え、悠久の緑広がる幻想の世界。

その一角にある、人々の憩いの場、『ライジアパーク』。
太陽の光が一番高く、強く輝く時分。

その名の通り、中央にある広場には、黒山の人だかりがあった。

誰もが一様に固唾を呑み、瞬きなど当の昔に忘れてしまったかのように。
一人の人物に注目している。

観衆が注目するのには、当然理由があった。

それが、見世物であることは勿論の事。

それを行う演者、群衆の中心に立つ人物が。
思わず行来の中途で立ち尽くすほどに。
神に造詣されたが美貌を持つ少女だったからだろう。

これから始まる何か暗示するかのように。
その儚い羽撃きを、風との舞を続ける髪色は金。
太陽の光を浴び、それ自体が光を生み出しているかのようであり、

それは持ち主を包むように、長くゆるやかに靡いている。

だが、生きている証を示すものは、それだけだった。

彼女はあまりに完全に整いすぎていた。
着ているものも黒を基調とした、陽の下にそぐわないドレス。
その様は……気高く清廉とした人形であると称されてもおかしくないだろう。

肌は真雪のように白く、どこか一点を見つめたままの紫の瞳は。
その動かぬ表情のせいか、本物の紫水晶……宝石によって作られているのではないかと思わせる。

しかし。
その作り物めいた少女の静寂は、少女自らによって破られた。

「……」

少女は、常人には届かぬほどに小さく何事か呟き、おもむろに、滑らかに、両手を広げる。

まさしく、天を抱くように。

その、たった一動作だけで。

観衆の感嘆と驚愕の呻きが、波紋のように広がった。

だが、その波も。

突如として少女の頭上に出現した、炎の塊によってかき消される。

例えるなら、小さな太陽。

太陽は、重力から解き放たれたかのようにふわりと浮かび上がり。

そのさらに天上にある、本物の太陽と重なり合うようにして周囲を照らした。

それは、不思議な光景だった。

たった今、ここに来たものがそれを見たのなら、

その炎の向こうに、本物の太陽があることに気がつかないかもしれない。

そんな炎を、少女は表情のないまま見上げ、再び何やら呟く。

するとその瞬間。

まるで、隠された本物の太陽が、燃え盛る嫉妬の炎を発したかのように。

少女によって創り出された炎は爆発、四散した。

重力の縛めから逃れられなくなったそれは、そのまま地上に降り注ぐ。

真下にいた少女を中心に、周りにいた観衆をも巻き込んで。

驚き焦り、逃げようとする観衆。

その中の真下にいた何人かが、降り注いでくる炎の塊を見上げたまま、
全く動こうとしない少女に気付いた。

声にならない叫びが、辺りにいくつも上がる。
もう間に合わない。
この世のものとは思えない美しさを持った少女が、
炎によって無残にも焼かれる様を想像し、顔を覆うものもいた。

だが。
少女は、やきもきする周囲をまるで気にした様子もなく、再び何事か呟いた。

すると、どうしたことだろう。
それまでただの炎の塊であったものが。
少女に触れる直前で、炎によって造形された鳥に、蝶に、果ては竜の姿を成したのだ。

まさしく、仕えるべき王に仕えるように、愛でるように少女を抱き、包み込んで……。

やがて、霞のごとく、消えていった。

後には、炎の熱気すらも残らない。
ただ、少女が変わらぬ表情のまま、立っている。

再び、訪れるは嵐の前の静けさに等しい、無音の世界。
一瞬の膠着。

しかしその静寂は、いつの間にそこに立っていたのか、
少女の傍、従えるようにして立つ、一人の老人によって破られた。

「とまあ、魔術を極めれば、自ら創り出した『魔導人形』でさえ、
ここまでできるということだ。
この意味、理解したかな？」

いや、いつの間にではない。
老人は最初からそこにいた。
初めからそこにいて、目の前にいる少女に、命を下していたのだ。

「ご苦労。下がってよいぞ」
「……」

老人がそう言うと、やはり少女は表情を変えぬままに、
それでいて気品のある、作り物とは思えない動作で一礼する。

そして、陽炎のように少女の輪郭がぶれたかと思うと。
そこには最初から誰もいなかったかのように。
風に流されるようにして、少女は忽然と、その姿を消した。

「魔法の教義、魔道の資格を欲する諸君。ご用命は、我がカムラル魔法教会まで」

老人がそう締めたその後に。
驚愕と賞賛のどよめきが起こるのは、最早定められしもの、だったのかもしれない……。

（第2話につづく）

2、素顔で笑っていたい

広場での出し物の盛況振りが窺える、広場から建物を挟んだ裏路地。

そこに、さっきまでその中心にいた人物、陽炎のように姿を消したはずの、少女がいた。

「あーあ。また何人騙されることやら」

いや、消えた少女ではないのかもしれない。

そう思うほどに、先程の見世物の時と、雰囲気ががらりと変わっている。

「あ〜、暑かった」

苦笑してひとりごちると、少女はおもむろに、金の髪に触れる。

どうやらそれは、かつらだったらしい。

その中から、長年太陽の陽の下で育まれたかのように瑞々しい、栗色の髪がこぼれる。

いや、よくよく見ると、押し込まれるように後ろ手に纏められている長い長いその髪は、

他にも金に紅……三つの色が映えるのがわかる。

それは、彼女が特別にして希少な人物であることを、如実に表している。
同時に、彼女が目を背ける、世界の秘密。
世界の礎となる、消せない証拠でもあった。

「いてて、これ苦手なんだよな、外すの」

竹を割ったような、聞くだけで『やんちゃ』という言葉が似合う、それでも高く甘い声で呟き。
続いて瞳から取り出したのは、紫色一色の薄っぺらい硝子だった。

今まで隠されていた本当の瞳は真の赤色。
紅髄玉（カーネリアン）と呼ばれる光輝を宿している。

どうやら先程は変装をし、無機質だが美しい『魔道人形』を演じていたらしい。
今の状態を、見世物の観衆が見たら別人と思えるほど、変わっていた。

変わらないのは、儚さと紙一重の、身の毛のよだつ美しさだろうか。
むしろ先程まで演じていた姿より、危うく儚く見えてしまう。

「さて、帰っかな。どうせじいちゃんは入会の手続きで忙しいだろうしな」

蓮っ葉とも取れる口調で、ひと伸び。

もう、完全にいつもの姿、である。

名はカズ。カズ・カムラル。
『ユーライジアスクール』を纏める四大勢力の一つ、カムラル家の、たった一人の跡取り。

このお話は。
その心内に、自身ですら目を逸らし、拒絶する秘密を抱える、カズ・カムラルの生の一片である……。

物語の舞台、ユーライジアの世界は、世界を司る十二の意思ある根源の力を借り、
媒介として様々な奇跡を起こす、所謂『魔法』と呼ばれるものが定着している世界だ。

ユーライジアの世界にある四つの大陸。
その一つである、世界そのものと同じ名を冠するユーライジア大陸には、
そんな魔法、十二の根源に密接に関係する世界と共存するための

教義の施設、
『ユーライジアスクール』と呼ばれるものがあった。
ユーライジアの世界におけるスクールとは、国と同義であり、
世界に散らばる諸国家と同等に扱われている。
カムラル魔法教会は、国としてのスクールへの発言権を持っているが、
教義の場として見れば、スクールを補助する（有料で）機関でもある。
教会専門の建物もあり、多くの会員を抱えるが。
カズ自身は、育ての親であり、祖父であるカムラル老しか身よりはなかった。
教会の運営に、国の政にと大忙しのカムラル老。
おかげで家計は潤っているどころか、いつも火の車で。
『リトクラス』（スクールにおける最小学級）に入学したてのカズ自身ですら、
こうして働きに出る始末。
まあ、半分詐欺めいたところのある仕事だが。
カムラル老の元で魔法を身につけ、高めていくことは、
この世界で生きていくことにおいて損はないだろうと、カズは思っている。
「でもなぁ」

それでも、カズはぼやく。
カムラル老は、子供のカズから見ても立派な人物だった。
家にお金が入ってこないのも、国を支えるために使っているのだと理解しているし、
偉いことだって分かっている。
こうして仕事の手伝いをすることだって嫌じゃない。

なのにぼやくのは。
カズが、昔のもっと『カッコいいじいちゃん』のことを知ってしまって、
物足りなく感じているからだろう。

ユーライジアスクール元町にある、冒険者ギルドに所属していた有名な冒険者。
弱気を助け、決して力にこびることのない、『夜を駆けるもの』。
みんなに尊敬されていた、カッコいいじいちゃん。

それなのに、カズはその生き様を、カムラル老本人から聞かされたことは一度もなかった。
知ったのは、スクールの図書館に所蔵されている過去の新聞を見て、だった。

カズにはそれがもどかしくて、悲しかった。
カムラル老の教えてくれることと言えば、日常の生き方や魔法のことばかり。

まぁ、それでも。
カズは魔法を覚えるのも勉強するのも大好きで。

両親のいない自分をここまで愛情を持って育ててくれたこと、カズはちゃんと分かってはいる。

愛情云々については、分からざるを得なかった……そう言うべきなのかもしれないけれど。

（第3話につづく）

3、ｒｅｓｉｓｔａｎｃｅ～マケナイキモチ～

カズのたった一人の家族、カムラル老の偏愛。

カズ自身がそれにはっきり気付かされたのは。
半年ほど前の、ユーライジアスクールへと正式に入学した日の事だった。

カズが入ったのは風組（ヴァクラスト）。
普通なら、男女一組となって机を共有するはずが、
カズの隣は、何が楽しいのか、カズを見て笑顔を絶やさない、のほほん、とした少年だった。

これだけなら、人数が合わなくてあぶれたのだろうと納得できたのかもしれない。

だが、カムラル老に、学校へ行くときはこれ以外着てはいけないと、
きつく言われたスクールの制服なのに、他の男子生徒が誰一人それを着ていなくて。
逆に女子生徒たちが自分と同じものを着ていれば、さすがにおかしいと、カズは思った。

そして。そのおかしさを確信したのは、当時（今もだが）クラスの誰よりも小さくて、

一番前に座っていたカズに向かって、教壇に立った先生が、
『ほな、女の子のほうから、自己紹介しよか～』なんて、言った瞬間だった。

どうやら自分は、女だと思われているらしいと気付いたのはその時。
故にカズは叫んだ。
『オレは男だーっ！』と。
力の限り。
自身で目を背けている嫌な事から、真っ向から対立するために。

クラスじゅうに響いたその声は、ある意味自己紹介のつかみとしては、
うまくいっていたのかもしれない。
しかし、カズが未だにその日のことを忘れないのは、それからが酷かったからだ。
何せ、せっかく『自分は男だ』と宣言したのにも関わらず、その事を先生ですら信じてくれない。

カズの哀れなほど必死な叫びは、冗談か何かだと受け取られたらしい。
だが、先生は悪くないのだろう。
悪いのは、カズに日頃から女物の服ばかり与えていたカムラル老

……
いや、そのことにすら気付かなかったカズ自身が愚かだったのだ。
今は、カムラル老が自分を娘として扱っている理由を知っているから、
まあ仕方ないと自分を納得させているカズであったが。
その頃のカズは、『魔法を扱う以上、スカート着用が当たり前』なんていうカムラル老の言葉を本気で信じていたからいただけない。
女子生徒の制服を着てきてしまった（というか、それしか持っていなかった）カズは、
自分で『男だ』って宣言すればするほどドツボにはまっていって……。

（今思えば、よくぐれなかったよなぁ、オレってば）
それからまだ数ヶ月ほどしか経っていないが、そう内心で呟き、苦笑するカズ。
そんな事を考えながら歩いていると、カズは気付けば我が家へと帰ってきていた。

まず目に入るのは、炎の根源魔精霊、【カムラル】を表わす巨大な『三角架』を掲げる、
荘厳な建物。

ユーライジアの世界各地に散らばる、カムラルを祭る教会の総本山と呼ぶべき場所だけあって、
敬虔なる豪邸と称するにふさわしい建物である。

だが、その目の前にある建物は、カズの暮らす家ではない。
カズがカムラル老と暮らす家は、その建物に覆いかぶさるように、隠れるように、
ひっそりと立つ小さな家である。

「思ったより早いな。相当釣れてるんだな。着替えたかったんだけど、出直してくっか」

だが、その家に入るための入り口は、一つしかなく。
よって、家に帰るということは、目の前の巨大な建物の前を通過していかなくてはならない。

しかし今は、先程の勧誘を見て、カムラル老に教えを請おうと集まった人がたくさんいた。
カズは、せめて入会料をふんだくるまでは会員候補生たちにネタをバラすなと言われている。

つまり、未だかつてなしえたことのない、自らの意思を持って魔法を扱う魔道人形のふりをしていなければならず、ここで姿を見せてしまえば元も子もないので……

結局家にも帰れず、ドレスのままの格好で、時間を潰さなくては

ならなかった。

カズは、忙しそうにしているカムラル老を見て、複雑そうな笑みを浮かべ、踵を返す。
それは、そんな言葉さえ建前なのだと、カズは心のどこかで気付いていたからなのかもしれない。

現に、カムラル教会の会員の人達で、勧誘の時のネタを知る事となっても、
騙された、という感じで辞めていく人など、まずいないからだ。

むしろ、会員たちは、カズの正体を知ってもなお、より可愛がってくれる。
それは、カズがカムラル家に残された唯一の跡取りだということもあるだろうけど。

カズは、そうやって大勢の人たちにちやほやされたりするのが、ちょっと苦手だった。
他の国で当てはめれば『王族』という身分の同位置にいるのだが、そんな性格もあって、本来なら据えるべき世話係もカズにはいなかった。

身の回りのことは自分でやってきた。
それは、カズなりのせめてもの自己主張だったのかもしれない。
それが、自身で自身の秘密を暴かぬようにと、無意識に行っていることなどとは、知る由もなく。

大切にされているのも、愛されていることも、もちろんカズにとって悪い気分ではなかったが。
その実、カムラル老は本当の自分を見ていないんじゃないかって、カズは思っていた。

どうやらカズは、カムラル老にとっての妻と、その娘にとても似ているらしいのだ。
彼女たちがカズにとって本当の親であるのならば。
それは似ていて当然ではあるのだが。

自分を通して、今はもうない大切な人たちを見ているんだろうって、
幼いながらも聡いところのあるカズは、とっくに気付いていた。

故に、ささやかに抵抗する。自身の身分を傘に着ず、『姫』であることに抵抗する。

だが、はっきり拒絶しなかったのは。
それによって自分を見てくれなくなるんじゃないかって、恐怖心があったからに他ならない。

きっとカズが、自分を強く主張しようとも、
カムラル老がカズを見捨てるなんてことはないのだろう。

だが、両親を知らない、存在するかどうかも分からないカズにとっては、
そう思っても仕方のないことなのかもしれなかった。

そんな事情もあって。カズは暇つぶしの時間つぶしのために、
ユーライジアの街中へ戻ったのはいいのだが。

その姿は、とにかく目立って仕方がないので、自然と人で賑わった出店通りには向かわず。

人気の少ない、所謂カズ達王族が住み暮らすような、
高級住宅街へと足を向けることにしたのだった……。

（第４話につづく）

4、RUSH&DASH！

それからすぐにカズが辿り着いたのは。
背の高い、白磁のアーチ……門構えが備え付けてある、ユーライジアスクールの『校門』。

スクールの入り口はいくつかあるが、その間には内外を遮断する天高い壁が伝わっている。
ユーライジアの世界で一番の敷地面積を誇るといわれるユーライジアスクールは、
十年経っても全ての場所を知ることはできないんじゃないかと思えるくらいに広い。

カムラル魔法教会も、建物としては相当の大きさだが、
ユーライジア大陸三分の一が、ユーライジアスクールのいわゆる国土であるから、
そもそも規模が違う。

現在はこの校門をくぐり、広大な『グラウンド』に囲まれた中央通り抜けた先に、
各所へと瞬時に移動できる【虹泉（トラベルゲート）】と呼ばれる、
【金（ヴルック）】属性の魔法装置があることで、危険は減ってきているのだが。

ユーライジアスクールの敷地内、特に建物を覆うようにしてあるグラウンドには、

野生の獣だけでなく、魔物や魔精霊まで普通にそこに暮らしており、自然に近い場所でもあって。

一昔は、課外授業で遭難、行方不明、なんてことも頻繁に起こっていた。
だが、カズにはそんな情報は……興味を引かれる、ということ以外の何物でもなかった。

何故ならカズは、冒険が好きで、未知なる物を知ることが大好きだったからだ。
魔法が大好きなのも、その探求には終わりがないからだし、
ギルドで『夜を駆けるもの』として活躍したカムラル老に憧れるのにも、そんな理由がある。

今は、この巨大すぎる箱庭での冒険がせいぜいではあるが。
いつか、仲間とともに冒険の旅に出たい。
それが、カズの夢だった。

今はまだ、年齢的にも立場的にも、それが叶うべくもないことは、分かっていたが。

「う、トールの白ネコだ」

今日はどこに行こうか……カズがそんな事を考えていると。
ふいに、絹のような毛並みの、尻尾の先だけの茶色と、同じ色の靴下を履いているのが特徴的な、

小さな白い猫が、虹泉の虹色の渦から飛び出してきた。

首輪をしてはいないが、それが野生のものではないことをカズは知っている。

スクールに入ってからできた友達のひとり、トール・ガイゼルといつも一緒にいる

（どうやら飼い主ではないらしい）猫で、名をヨースと言った。

普通の獣が、虹泉から出てくることなんてまずありえないことなので、

それが何なのか分かるくらいに賢いのか、はたまたトールに従う【魔精霊】なんじゃないかなぁと、カズは思っている。

「……にゃっ？　にゃ～にゃ～にゃ～っ！」

と、カズの呟きはヨースにも届いたらしい。

はっと顔をあげたヨースは、まっしぐらにだだだだっとカズの元へと向かってきた。

「どわわぁっ！　ど、どうかしたのか？」

カズは、ヨースを何とか両手で受け止める。

子猫でまだ小さくて、ふかふかで柔らかくて、抱き心地がよくて。

普通ならカズでなくても顔が緩んでしまうところなのだが。

カズは実の所、ヨースが苦手だった。

それこそが、魔精霊かも、と思った理由の一つなのだが。

ほんの僅かに、カズの苦手な……【光（セザール）】の魔力をヨースは発しているのである。

いきなりで、過剰な反応をしてしまったのはそのためなのだが。

当のヨースは、内心びびっているカズにお構いなしでカズを見上げ、

ふんふんと鼻先を近づけてきた。

無意識にのけぞりつつヨースをかわそうとするカズ。

ざらざらとしてそうな、舌先が覗く。

「……っ！」

ぞわわ、全身が総毛立ち、思わずカズが、息を呑んだその瞬間。

「おい、馬鹿ヨースっ！　お前いきなり飛び出してったと思ったら、なにしてんだよっ」

「わわっ」

まるで奪い取るかのように、ヨースを掻っ攫われて。

カズはよろけてそのままヨースと一緒になって、奪い取ったツンツン頭の少年……

トール・ガイゼルの方に倒れこんでしまった。

ぼふっと、分厚い胸板の感触。

「な、なんだよっ。いきなりひっぱんなよ、トール！」
内心助かったような気はしないでもないけれど。
カズはそれをおくびにも出さず、同い年のくせにでかすぎなんだよ、とばかりに悔しがり、
頭二つ三つぶん背の高いトールを見上げつつも睨み付ける。
その鍛えられた肉体は、とても同じリトクラスに入りたての子供とは思えない体格をしていた。
いくら鍛錬しても筋肉がつかない自分と比較して、ちょっと歯がゆい気分になるカズである。

「こいつは可愛い顔して危険なやつなんだって、いつもいってるだろ」
すると、トールは怒ったようにそう呟き、カズの頭をむんずと掴む。
そしてそのままぽいっと放られる。
「てめっ、ちょっとでかいからってものあつかいすんなよっ！」
「カズが小さすぎるんだよ、ちゃんと飯食ってんのか？」
見上げている時点で、ちょっぴり負けた気分に陥りつつ、そう抗議すると。
真っ直ぐ芯の通った黒い瞳で、少しも視線を逸らさずに、トールはそんな事をのたまい、
かと思ったらわしゃわしゃと髪をかき混ぜてくる。

「な、何すんだっ！　このっ、ちょっとでかいからって調子にのって～！」

それは、どうやらトールの癖らしい。

きっとトールにとってカズは、ヨースと似たようなものなのだろう。

王族の、しかも決して認めたくない『姫』に対する接し方は微塵も感じさせない。

視線を外さないこと一つとっても。

彼はカズにとって、貴重な存在であるのは確かだった。

（第５話につづく）

5、いたずらに命をかけて

それは、数ヶ月前、スクール入学したての頃の話。

出会ったばかりの頃、トールに対してカズは怯えてばかりだった。
こう、なんていうか触ったら怪我しそうなナイフのようというか、
攻撃的な力が滲み出ていたからだ。

何が気に入らないのか、いつもむすっとしていたのもカズに一歩
引かせた理由になったかもしれない。

最も、今となってはトールに対するカズの心情は純粋に友情から
来る親愛である。
髪をかきまぜられるなど、それこそ日常茶飯事ではあるが。
同じ事をカズにとって特別な存在にされたものならば、
ここまで平常心でいられることはなかったに違いない。

……そんな『どうしようもない』事をつい考えてしまう自分をす
ぐさま否定し、
カズはぐわんぐわん振り回された事に目を回しつつも抗議してい
ると、ぴたっとその動きが止まる。

「うん、あんまいじめると泣くからやめとくか」
「だれが泣くか……ふぐむぅーっ」
「おお～、のびるのびる」

やめておくか、何て言い終わるが早く、トールの手はカズの両頬を掴んでいた。
カズの涙腺が弱いのを知っていての、嫌がらせである。
実はその行為はトールの生命的な意味合いで危険を孕んでいるのだが。
トール自身もそれを分かっていてからかっているので、それだけでも彼の豪胆さが伺えるというものだろう。

「ほら、泣いてんじゃん」
「う、うるせーっ、ひきょうだぞーっ、バーカ、バーカ、バーカ！」

これでユーライジアの王子の一人、なんだから信じられねぇと、自分を棚に上げながらカズが涙目で抗議すると。

「にゃ……にゃにゃんにゃな、にゃーん？」

気付けばトールの肩にいたヨースが、なんだか不満そうな、呆れたような声をあげる。

「う……分かってるよ。だってカズってからかうと面白くてさ」
「にゃ、にゃにゃにゃーん？」
「馬鹿、そんなんじゃねーよっ！」

どうやらトールにはヨースの猫語？　が分かるらしい。

その、通じ合ってる様を、ちょっとカズが羨ましく思っていると。
トールは何かを思い出しかのように、再びカズに向き直った。

「あ、そうだよ。こんなことしてる場合じゃないんだって。カズさ、タカのこと、見なかったか？」　「タカ？　いや、だって今来たばかりだし」

話題に上ったタカこと、タカ・セザールは。
こことは別の大陸にある、ユーライジアスクールの姉妹校、『ラルシータスクール』の長である、
ルレイン・セザールの息子である。

しかしタカは、現在ユーライジアスクールに通っていて。
カズにとってはトールと同じく、ある人物に紹介され、知り合った友達の一人だった。

ちなみにトールは、カズと同じユーライジア四王家のひとつ、ガイゼル家の一人息子で。
そんなタカやカズと立場的には同じではあるのだが。

ガイゼル家は代々、この人と決めた主君に仕えることを良しとする古い一族で、
トールはタカのことを主君と決めていたりする。

二人は確か今日、ユーライジアの先生の元で、厳しい訓練の最中だったはずなのだが。

「タカが修行ぶっちするなんてめずらしいじゃん。何かあったのか？」

タカは、『ルナカーナ・スピア』と言う、いつか現れるであろう巨悪を討つ、
とまで謳われる伝説の武器に見合う人間になるために、
物心つく前から、それは厳しい修行を続けている。

ユーライジアスクールよりも、より実践的なラルシータスクールの『授業行程（カリキュラム）』を、既に終えてしまっているすごい奴。
カズは、そう認識していた。

王族らしくない、年相応の子供っぽい少年だが、
トール以上に曲がったことが大嫌いな真っ直ぐな少年で、
更に『クラス委員』をなども務めていて。
何の理由もなしにそういった修行を投げ出す人物ではないはずなのだが。

「俺もまだよく知らないんだけどさ、時々あるんだと、こういうこと。
先生が言うには、お母さんを失った時のことを思い出して、精神が不安定な状態になってるらしい。それで、休憩の時、目を離したらどっかいっちまって、探したんだけど、みつからなくてさ……」

別にトールのせいではないのだろうが。

言って、何だか落ち込んだ様子を見せるトール。

その相手を思う様は、とても出会ったばかりの頃の険悪さを微塵も感じさせない。

「そっか。それじゃ、オレもさがすの手伝おうか？」

タカの母親が、この世にいないらしいことは、カズも知っていた。カズも似たような境遇ではあるし、この世界では珍しくないことではある。

故にちょっとはその気持ちも分かるかもしれないと、カズはそう思ったのだ。

「ああ、頼むよ。よく考えたら……俺が見つけるより、いいかもしれないしな」

トールにもそれは伝わったらしい。

すぐに、一緒に探すことが決定し、二手に別れ、違う場所へと向かう虹泉へと入り込んでゆく……。

（第６話につづく）

6、さよならの記憶

スクールは、とにかく広すぎる場所だった。
故に今日中には見つからないかもしれないな、なんてカズは考えていたのだが。

そんな思惑とは裏腹に、奇跡的とも思える確率で……タカはすぐに見つかった。

第三十八中庭。

大きな木の影に寄りかかるようにしてしゃがみ込み、大きなスピアを抱え込んで、
うつむいている金髪の少年の姿から、寂しそうで、昏(くら)い、
どんよりとした空気が伝わってくるのがわかる。

クラスの優等生。希代の天才児。みんなのまとめ役。
早くもそういう立ち位置を築いていたタカからは、想像もつかなかった姿である。

もしかしたら、泣いているのかもしれない。
何度も死にかけるほどの厳しい修行ですら、弱音一つはかないタカ。
でも、それは表向きのもので……本当はいつだって苦しかったのかもしれない。

だからカズは、そんなタカを見ていられなくなって、気づけば声をかけていた。

「タカ？　そんなとこでなにしてんだ？」
「……っ。あ、カズか。いや、ちょっとな。休憩、休憩」

カズの声にはっとなり、ごしごしと両目をこすり、赤くなった銀色の瞳を向けてくる。
口元には笑みを浮かべているが、どうにもぎこちなかった。

「……だいじょうぶか？」
「うん。まあな。悪い。かっこわりぃな、俺」

気を取り直すように立ち上がるタカだったが、その足取りはおぼつかなく、
バツの悪そうな顔をしている。
やなとこ見られちゃったな、とでも言うように。

「お母さんのこと、思い出したんだって？」

それでもカズはすぐさまそう訊いた。
もう一人の大切な男友達に対する、純粋な心配。
それが涙など流したことすらなさそうに見える友達とも呼びたく

ない『あいつ』ならば。
多分自分はもっと愚かなほどに取り乱しているのだろう、なんて思いながら。

「……よく、分からないんだ。今だって、母さんが死んだ時の事すら、俺は思い出せない。
でもさ、思い出そうとすると、すげえ悲しくなってくる。何でだろ？　わけわかんねぇや」
「……」

聞くことに躊躇いのないカズに対し、タカは、それにちょっと苦笑していたが。
少し考えた後、そんな事を呟いた。

よっぽど辛い記憶、なのだろう。
そうやって、自分で思い出せなくなるくらいには。

「そっか。……でもま、オレよりはマシじゃねえの？
オレなんて、両親のこと、これっぽっちも思い出せない。悲しい記憶すらないからな」

言い方はおかしいかもしれないが。ちょっと羨ましいとも思うカズである。
自分には、そう思う思い出すらない。
存在しているかどうかさえ、怪しいものなのだ。
何故ならカズは、『虹泉の迷い子』、なのだから。

そんな自嘲めいたカズの言葉を、タカはどう受け取ったのだろう。

「……ごめん」

「な、なんでタカがあやまるんだよ」

突然そう言って頭を下げるタカに、カズはちょっとうろたえる。
ますます落ち込むような仕草を見せるタカに、カズは頭をかいて。

「あぁ、もう！　タカにはそういう暗いのは似合わないって。よし、　オレと勝負しろ！
もやもやの発散、ってやつだ」

「え、えぇ？」

特に考えたわけでもなく、トールがいつも口癖のようにタカにそんな事を言っていたから、
真似して口をついて出た言葉に、タカも驚きの声をあげる。

「そんな、危ないって！」

「んだとこらぁ。オレ程度じゃよわっちくて、相手にもなんねぇってか？」

「い、いや。そういうわけじゃないけどさ。女の子に手をあげるみたいで、気が引けるんだよな」

「……よく言ったぁ。その言葉、後悔させてやる！」

きっとその会話は、予定調和、だったのだろう。

「おいおい。何してるかと思ったら……」

だから、しばらくしてトールが駆けつけた時。
お互いぼろぼろで、喧嘩の後みたいな大の字になって寝こけているその光景も。

結果として当たり前にあるべきもの、だったのかもしれなかった……。

※　　※　　※

それから。
虹泉のある場所で、帰る方向の違うタカと別れ、
いつの間にかいなくなってたヨースを気にかけていたら。
ほっぽっといて大丈夫だ、猫なんだから……なんて言われ。

カズはトールとともに、家路についていた。

トールの家は、ユーライジアの町外れにある、大きな大きな樹のある庭付きの、
古いだけあって歴史を感じさせる、ガイゼル式の武家屋敷で。

古い骨董品（金目のもの）がたくさんあり、そういうものが大好きなカズにとって、
来て見て楽しい場所でもある。

「おい、いつまでついてくるつもりだよ。言っとくけど、もう家にあるものはやらねーからな」
「なんでだよ、けち、とーへんぼく！」
「なんでだよって、お前この前、やった小太刀、武器屋に売ったろ」
「うっ、それは……」

なんだか本気でご立腹な様子のトール。
だが、試しにいくらで売れるか武器屋に掛け合ってみて、
ぶったまげるほどの値段をつけられ、目がくらんだ、などと言えるはずもなく。

「べ、べつにいいじゃん。もらったオレの自由だろ？」
「いくねーっての。おかげで親父に怒られて買い戻すはめになったんだからな！」
「い？　そうなの？　そりゃ悪いことしたな。トールのおじさん、こわそうだもんなぁ。

……オレ、謝っといたほうが、いいか？」

親父という存在がカズの中にないからなのかなんなのか。

一度会ったことのあるトールの父親は、毛むくじゃらの、例えるなら百獣の王みたいな感じで、

ちょっぴり怖かった印象があった。

故にちょっと反省してカズがそう言うと。

「……いや、いいって。親父はカズのこと怒ったわけじゃないし」

「そうなのか？」

「うん、よく分かんねーけど、俺のガイージョとやらがないのが悪いらしい」

「がいーじょ？　なんだそれ？」

「俺もちゃんとは教えてもらってないんだよな。勇者になるためには不可欠だ、とか言ってたけど」「……ふーん。じゃあ、トールが悪いってことで全て解決？」

「なわけねーだろっ、おかげで三ヶ月こづかいなしなんだぞ、金返せっ！」

さりげなく流すつもりだったが、さすがにトールもそこは捨て置けないらしい。

しかし、そのお金は欲しかった魔術教本で消えてしまったなどとはやっぱり今更言えるはずもなく。

「……いいじゃん。こづかいくらい。その日の飯に困ってるわけじゃないだろ？」

なんて、誤魔化してみたりした。

その言葉と仕草が、相手にどんな影響を与えるのか、なんて一切気付くこともなく。

すると。
「あーそうだな。……うん」
単純な？　トールは効果覿面。あっけなく騙されてくれる。
こいつ、こんな単純でこの先の人生大丈夫か？
なんて余計なことを考えてみたりするカズだったが。

そこが気のおけない友人として気に入っている所だと言うのも、また事実で。

「ま、勝手に売っちゃったのはわるかったよ。もうしないようにする」
「ああ、そうしてくれ」
「うん。よく考えたら、トールにもらった剣売るより、トールのおこづかいたかったほうが早いもんな」
「そうそう……って、まてよ！　なんだそれはっ、どうしてそうなる？」

カズがからかうように、上目遣いそう言うと。
案の定、単純なトールは言葉通り受け取って怒り出すから。

そんなトールに、どこか安心しながらも。
お金、そのうち返してやるか、なんてカズは考えるのだった……。

（第7話につづく）

7、君は歌ってくれた

絶対やらねーからな！　と、卵を守る親鳥のごとく威嚇してくるトールに。
でも頼めばくれるのかなーなんて苦笑しつつ。
カズはトールを家に送り届ける形で、今度は自らの家へと踵を返す。

別にわざわざ送らなくちゃいけないようなタマではないけれど。
そもそもカズも、暇つぶしでトールについていったわけなので、
まあ、当初の目的は達成した、と言えるだろう。

「さて、そろそろいいだろ」

今や、夕日の色は深い橙を携え、カズは自分の好きな時間帯がやってきていることを実感する。

――逢魔が刻。
カズの想像しえない何かが起きてもおかしくない、そんな時間帯。

その、何かが起こるかもしれない、という期待のせいなのか。
この時間帯になると、気分が高揚してくるカズである。
どんな些細なことも見逃さぬようにと、自然と神経が研ぎ澄まされていくのが分かるのが、

また面白かった。

「……あ」

と、その瞬間。そんなカズが待ち望んでいたもの。
びゅうと吹く夏の始まりの生温かい風の中に、
風音とは異なるもの……歌が聞こえた気がして、立ち止まる。

いや、気がした、ではない。
間違いなく、その歌は、風の中に潜んでいる。
何故ならそこに、魔力の息吹を感じたからだ。

生まれつき、人より魔力の感知能力が高いカズにとって、
それを嗅ぎ取るのは造作もないことだっただろう。

しかし、それをつぶさに感じられたのは、その歌を、声を、【風】（ヴァーレスト）の魔力を、
カズが魂に刻むがごとく、知っているからに他ならない。

何においても特別であったからに他ならない。

現にカズの鼓動は、それを聞いたとたん早鐘を打ち、
心は何か暖かいものに包まれたかのように、すでに捕らわれていた。

カズは夕闇の中、引き寄せられるように、逃さぬように、それに向かって走り出す。
やがて辿りついたのは。涼しげな草花の香る、ある家の庭先だった。

カズはその家を知っている。
その歌を知っているのと同じように。

庭先で気持ち良さそうに歌っている、一見どこにもいそうな、
それでいて、絶対無二の神の声を持つその少年のことを、よく知っているのと同じように。

少年……マーサー・ヴァーレストは。
カズがユーライジアスクールに入って、初めて仲良くなった少年だった。

『男だ』なんて宣言しながらも、たくさんの友達ができたのも彼のおかげだし、
カムラル老に騙されぐれかけたカズを、カズ・カムラル一個人として、
初めて認めてくれた人物でもある。

初めてのクラスで、隣で楽しそうに笑っていた少年。
少年にとっても、カズにとっても、そこが初対面ではなかったせ

いもあるだろうけど。

クラスの誰一人、『男である』と言うカズの言葉を信じてくれない中で、
少年だけは既に、カズの内面そのものを見ているような節があった。

――――「カズは面白そうだし、カズの隣がいいな」

少年自身は少年の誇りを取り戻す、という理由もあっただろうし、何気なく言った一言だったのだろう。

だが、そんな何気ない一言がカズを救ったこと、おそらく彼は知らない。

カズはカズのままでいい。
そう言われたような気がして。

少年がカズに興味を持つように。
カズが少年、マーサーに興味を持つのに、さして時間はかからなかった。

それが……いずれカズ自身を追い込む事になろうことなど、知る由もなく。

「おーい、カズ？　カズってば。また気絶しちゃったの？」
「へ？　あ、あれ？」

深く考えすぎていたせいか。
気づけばマーサーの歌は終わっていて。

泣き顔なんて想像すらできない『へらへらした』笑顔の、
カズより頭一つ分くらい背の高い少年が、カズの目の前でひらひらと両手を振っていた。

「だぁあーっ、またかよっ。やめろっつってんだろ！
なんなんだよ、お前の歌はっ。いつのまにか吸い寄せられてるしっ！」

我に返ったカズは、早くなる鼓動と熱を帯びる頬を必死で誤魔化しつつ、
そうはいくか、とばかりにばっと間合いを取り、目の前の少年を威嚇する。

これで何度目だろうか。
数えるのも億劫なくらい、その歌に引き寄せられてしまう自分に、カズは戸惑いを隠せなかった。

おそらく、セイレーンとか人魚とか、そういった類のものが使う、依存性、常習性のある歌と同じものなのだろうし、
その歌が、『風（ヴァーレスト）』の根源魔精霊から派生した、
【音系（サウンド）】という魔法の中の一つであるだろうことは、分かっている。

カズが元々その属性に極端に弱いたち（実は体に合わない苦手な属性が多い）なのかなんなのか、
こうして、いつでもどこでも、あっさりとつられてしまうのだ。
だから、むやみに歌うんじゃねえと、きつく言い聞かせたいのに。
目の前の、何が嬉しいのか笑顔を絶やさない少年は、一向にのれんに腕押し状態で。

「あ、よかった～。気絶してたわけじゃないんだね。これで僕の勝ち、かな？」
案の定、話を聞いているのかいないのか、勢いの殺がれる自分本位な笑みを向けてくる。

「いちいち根に持つやつだな。もう大丈夫だって。まだ憶えてんのかよそんなこと」
「もちろんだよ。こんな屈辱生まれて初めてだ、ってやつだからね」
「言葉の使い方、間違ってる気、するけどな」
呆れたようにカズはそう言うが。
言われてみればマーサーの言っていることは遠からず近からずだなぁと、カズは考える。
もちろんカズだって、その時のことを一度たりとも忘れたことはない。

言わせてもらえるなら、カズにとっても屈辱、といってもいいのかもしれない。

それは、マーサーとの初めての出会いの日のことで……会うなり気絶させられてしまったのだから。

（第8話につづく）

8、gettting started

――――それは、カズがユーライジアスクールに入学する少し前の日。

ふと入学前に学び舎が見たくなったカズは、カムラル老の目を盗み、
ユーライジアスクールの探検に出ていた。

そうして、何気なく訪れた中庭。

そこにマーサーがいた。

今みたいに歌を歌っていて。

手を伸ばせば届きそうな位置で、カズは無防備にもその声を聞いてしまった。

……後で聞いた話によると、それは『光（セザール）』属性に類する、
【ヴァルサド・ボードウェル】と言う名の、正真正銘の音系（サウンド）の魔法で。

入学前の子供に扱えるはずのない、弱いアンデッド等なら一撃で消し去ってしまうようなものだったらしく。

マーサー曰く、『一節もいかないうちに、泡吹いてばたりと倒れたのが、あまりにも面白くて大笑いした』らしい。

後でそう言われたカズは、もちろん殺意てんこもり芽生えて。

『火（カムラル）』の魔精霊と親密なる抱擁の刑に処してやったわけなのだが。

その時の衝撃は、とにかく物凄かったとカズは記憶している。

全身の毛という毛が総毛立つは、涙は鼻水は止まらないわさんざんで。

心失するほどの強い衝撃を受けたのに。

激しく気分が高揚して、嬉しいのやら楽しいのやら、くすぐったいのやら、

カズにはよく分からない……でも、もう一度聞きたいと思えるような、

でもそう思うこと自体が悔しいやらもどかしい気持ちでいっぱいになって。

気付けばカズは、マーサーを見れば、足蹴のひとつもしたくなるような、

そんなわけの分からない感情に捕らわれていたのだ。

故にムカつくし、歌うな！　と常々思っているのだが。

その一方で。

内心、しょうがないかなぁ、なんて気持ちになる自分に、

いつもカズは首をかしげるしかなかった。
それが何を意味しているかなんて、気づかないふりをしたままで。

ひとしきり笑ったマーサーは。
それからうんともすんとも動こうとしないカズに、たいそう慌てたらしい。

勝手に忍び込んだスクールの中で（それはカズも同じだから人のことは言えないが）、
人を殺してしまった、なんて思ったらしいから、
いくら能天気そうなやつとはいえ、その時の心中お察しする、と言う感じである。

しかも、彼にとっての歌は、彼にとっての誇りそのものだった。
自分の歌は全てものを癒し、心を穏やかにする、
なんて、子供のくせに変な自尊心を持っていたようで。

カズがそれから目を覚ました時、
（マーサーが運んでくれたらしく、スクールの『保健室』に寝かされていた）
笑顔で顔を覗き込んできたマーサーに、『この借りは必ず返すからね～』なんていきなりわけの分からないことを言われ。

それから入学式があって、お互いの名前を知って。
初めてのクラスでひと悶着あって。
なんだか一緒にいる時間が多くなって今に至る、というわけである。

「でも、僕、あの時すっごく怒られたんだよ？」

確かにそれはそうなのだろう。
これもカズは後で知ったわけだが。
そんなマーサーも、ユーライジア四王家の一つ、ヴァーレスト家の長男であり、
相手も四王家の人間だと知って、下手すれば国家問題になりかねないと、
マーサー自身散々絞られたというのは聞いていた。

「オレだってそうだよ。まあ、おかげでお前と仲良くなれたようなもんだし、いいんじゃねーの」　「それは……そうだね、うん」

たとえ傷つけたことの償いか何かだったとはいえ、おかげでカズは救われたのだ。

マーサーにとってはなんてことはないのかもしれない。
でもカズにとっては大事で、同じくらいの気持ちがあるかどうかはカズには分からないけれど。

マーサーがそうやって頷いてくれるから、なんだかそれだけで一日がよかったな、

なんて気持ちになるカズである。

「ところで、今日いつもの『仕事』だったの？　夜会用の高そうな服着てるけど」
「ん、ま、まぁな」

カムラル教会の仕事の事は、当然マーサーも知っている。
だが、女性用の服を着てマーサーのすぐ傍にいる自分の事を今更ながらに思い出し、
ちょっと焦るカズ。

「着替えたほうがいいんじゃない？　凄く目立つよ。何かぼろぼろだし」
「そうか？」
言われてみれば、タカと友情を確かめるがごとき喧嘩をして、
そのままだったことを今更ながらに思い出すカズ。

「そうだよ、ほら、早く」
そう言うや早くぐいぐいと引っ張るマーサー。
そんなマーサーの突然の行動にうろたえ、為すがままのカズである。

「あ、そうだ。ついでにシュンとイツキにも会ってってよ。カズに会いたがってたからさ」
「シュン？　あれ？　ちょっと前、会わなかったっけ？」

「ううん。前に会ったのは弟のシュンだよ。昨日の夜かな、妹のほうのシュンが出てきたから、
ちょうどいいと思って」
「あ〜、そんなこと言ってたっけか。じゃあ、イツキってのも？」
「うん、ミズキやヒロの弟だよ。滅多に出てこないから、久しぶりなんだ」

唐突な話題振りだが、マーサーには、六人の弟妹がいる。
だが、常に一緒にいられるのは二人だけ。
謎かけのようだが、『レスト族』がそう言う種族なのだから仕方がない。

一般的にレスト族と呼ばれる彼らは、一人の肉体に複数の魂を持つ種族だと言われている。

一番目の弟のシュンには同じ名前の妹が。
二番目の弟のミズキには、ヒロという名前の妹と、イツキと言う名前の弟がいて。

マーサー自身には、マニィと言う妹がいるらしい。
それが何かのきっかけで入れ替わり、人格どころか姿形まで変わってしまうのだという。

「じゃ、これ着替え。ミズキのでおっきくないよね？」
「当たり前だっつーの」

なんてことを考えていると、そのまま家に中に通され。
マーサーのただいまの声とともに、おじゃましますと言うや否や客室のような部屋に案内されて。

すぐに去ってすぐに戻ってきたマーサーが、弟のものらしいシャツとズボンを持ってきタカと思うとそんな事をのたまった。
からかいの気持ちなど微塵もないその口調に、ぶすくれながらカズがそれを受け取ると。

「お茶飲んでってよ。イツキとシュンも待ってるから」

そんな不機嫌にもまるで気付いていない様子で、マーサーはさっさと部屋を出て行ってしまった。

「……とろくさそうに見える割に、変に強引だな、あいつ」

最初から、そのつもりだったのかもしれない。
カズがそう呟きながらも、今さっきまでの不機嫌もどこへやら。

当たり前のようなマーサーの気遣いに。
によによと笑みの浮かんでいる自分にも気付かぬまま、
カズはすぐに着替えて部屋を出たのだった……。

（第9話につづく）

9、Such a lovely place

カズが着替えに宛がわれた部屋を出ると。
すぐに香ってきたのは、おいしそうなクッキーの匂い。

それを辿って、マーサーの家の中でも一際広い間取りを取っているらしい一室、
居間へとお邪魔せんと、ノックして扉を開けると。

「はじめましてだよ〜。あいたかったー」

空色ウェーブの長い髪の小さな女の子（それでもカズのほうが小さい）が、
扉を開けきる間もなくそう叫んだかと思うと、いきなり飛びついてきた。

「うわ、またかよっ、ちょ、ちょっと？」
「すっごくすっごくかわいい！　きれい、やわらかーい、いいにおい〜！」

まるでぬいぐるみ……いや、お日様に一日照らされたぽかぽかの枕に鼻を寄せるかのように、
擦り寄ってくる青い目の女の子。

なるほど、確かに変わっているらしい。

見た目以上に、少年のシュンのほうが、落ち着きがあったなって、カズは思い出す。

「えへへ。シュン兄の中にいる時からずっと楽しみだったんだよ。こうやってお話しするの！」
「はは。本当に別人なんだな」

されるがまま、苦笑して呟くカズ。
これなら長兄であるマーサーが、男だろうが女だろうが関係なく、その個人を見るようになるのも、妙に納得がいくカズだった。

ちなみに、マーサーたちの両親は健在だが、
今は、世界の平和を守る【ステューデンツ】として、世界中を飛び回っている。

自分たちでその日暮らし、と言う点においてはカズと同じ。
いや、弟妹の面倒を見ているマーサーのほうが上かもしれない、と思ったりするカズである。

「こっちも初めまして、でいいんだよな。ま、これからもよろしく、シュン」
「うんっ。よろしく～」

嬉しそうに飛び跳ね、元気よく答えるシュン。
そして、そのままくるっと振り返ると、たたたっと駆け出し、
それまでマーサーの背に隠れるようにして、恐る恐るといった感じでカズを見つめていた少年を、

ぐいぐいと引っ張る。

「ほらぁ！　イツキもあいさつ、はやくぅ」

「ぇ、あ……」

焦げ茶色の髪が片目にかかり、見るからに気弱そうで大人しそうな少年は、

人見知りする性質なのか、なんだかひどく緊張しているように見えた。

「イツキ、カズだよ。僕の一番の友達」

そんな背中を押すように、マーサーがそんな事を言う。

その言葉は、カズのとって最良であるはずなのに。

ズキリと胸が痛む。

暴いてはいけない秘密の扉を開けそうになり、全てを押し込め、

誤魔化すようにカズは言葉を返した。

「ま、まあ、そんなトコだ、よろしく」

「ははは っ、コイツ、照れてやがるぜ。笑えるー」

俯きつつの言葉で、誤解されたのかなんなのか。

不意に降ってきた、そんな言葉。

それは、イツキが発した言葉ではなかった。

実の所、カズにとってそいつは天敵みたいなもので、
今の今までずっと視界に入れないようにしていたのだが。
そこまで言われて黙ってはいられなかった。

「ん？　なんだ、おいちょっと？　暴力反対っ」

カズにがっしと掴まれて、ばたばたと暴れるのは、
手のひら程の大きさの蝙蝠のような翼を持った人、だった。

名前はルッキー。
銀髪赤目のそいつは、これでもれっきとした魔精霊である。
しかも、本名はルフローズ・レッキーノ、というらしい。

それは、世界を創ったと言われる十二の根源魔精霊……そのうちの、
【氷】の根源魔精霊と同名であり、もしかして本人！　なんて最初は思ったりしたカズであるが。

「ルッキーうるさい。このまま燃やされたいか？」

カズが握った手にちょっと魔力を込めてやると、途端にガクガクブルブル震えだす。
その怯えた様子がなんだか可愛いというか、憎めなくて。
さすがにこんなのが神の一人なわけないだろうなぁと、思う今日この頃である。

そんなわけで苦笑してカズが手を離すと。

しめたとばかりにばっと飛び上がるルッキー。

「へんっ、バカめ！　甘いんだよっ！」

マーサーの背中に隠れるようにして張り付き、べーっと舌を出す。
さすが、この家で一番安全な場所を分かっているらしい。

後で覚えてろよ、なんて思いつつ、カズは改めてイツキを見やる。
そして、なるほどと、内心唸った。

マーサーには、ルッキーのことをうちのペットだよ、なんて紹介されたが。
カズの見る限り、本名はハッタリだとしても、ルッキーが相当高位な魔精霊であることは間違いないんだろう。

彼がいるから、マーサーたちの両親も家を空けていられるんじゃないかとカズは思う。
しかしルッキーがここにいるのは、それだけではなく、
どうやらイツキの魔力を抑えるためにいるのだと、カズにははっきり分かった。

イツキがどこか怯えるように緊張しているのは、
自分の力を上手く制御できないせいもあるのに違いない。

「そんな構えなくてもいいぜ、イツキ。とにかくよろしくな」
「あ……よ、よろしく」

そう言ってカズが陽気にイツキの肩を叩くと、ますます縮こまる

イツキ。
お前の魔力が暴走しても平気だってことを伝えかったのだが、そううまくはいかないらしい。

「あははっ、カズ姉すっごい美人さんだから、イツキったらきんちょーしてるんだね」
「あ、あねきっ」

なんて思っていたが、それはカズの勘違いだったようだ。
赤くなって抗議するイツキに、シュンはケラケラと笑みをこぼしている。

「……」

これはよくない兆候だと、カズは思った。
それは秘密を守るために、許容してはならないもの。

「いいかお前ら、よく聞けぇ！　オレは、オレは男、だぁーっ！
美人とか可愛いとか絶対禁止、わかったか！」

故にカズは、そう宣言する。
一瞬だけ辺りがシンとなり、ちょっと優越感に浸ったカズであったが。

「「えええええっ！」」

見事にハモリを聞かせて、同じようなびっくり顔で、シュンとイツキが叫ぶ。

「いや、その。そんなに驚かなくても。つーかマーサー、それぐらい教えとけ！」

「えー？　別にいいじゃん。カズはカズでしょ」

「うっ」

マーサーのお決まりの台詞に、思わず言葉を失うカズ。

言われてみればそうかもしれない。相手にどう思われようと、自分は自分なのだと。

男とか女とか、くくってるのはむしろ自分の方ではないかと。

「そっか、そうだな。オレはオレだ」

「うんうん」

しみじみと頷くカズに、相槌を打つマーサー。

なんだかとってもいい気分で、話しが纏まった気がしたが。

「おい、マーサー。面白いから黙っとけって、オレに言わなかったか？」

「わっ、ルッキー。しーっ、だよっ」

「……」

そんな、なんだか気分がさいてぇになる二人の内緒話は。

聞かなかったことにする、カズなのだった……。

（第１０話につづく）

10、ワスレグサ

それから。
なんだかんだで新しく出会ったシュンやイツキたちとも、打ち解けていったのだが。

「これで、オレが会ってないの、あと一人だけだな」
何気なく言ったカズのそんな一言で。
賑やかだったその場の空気に、ひどく気まずい雰囲気が流れる。

しかし、その空気に気がつかないのか。
「そうだねぇ。僕も会ったことないから、会ってみたいなぁ」
しみじみと響く、マーサーの声。

言われて、カズははっとなった。
マーサーのもう一つの人格であるマニィ。
彼女はシュンたちやイツキたちのように、お互いの意思疎通ができない事を思い出したからだ。
つまり、マーサー自身、弟たちからは彼女の存在を聞かされているが、

マーサー本人は話したこともなく、顔も知らないのだ。
ちょっと前に、弟のシュンに、マーサー兄が気にするかもしれないから、
マニィ姉の事は言わないで欲しいと言われたばかりなのに。
カズは自分自身の失言に呆れてしまった。

「わりぃ、なんつーか、オレ……」
「何でカズが謝るのさ？」

思わず謝るカズに、本気で首を傾げているマーサー。
マーサーがマニィのことを知らないことに、シュンもイツキも、いたたまれない気持ちを抱いているのが分かるのに。
マーサー自身はなんでもないことのように振舞っている。
そう思うからこそ、余計にいたたまれなくなって。

「そ、そうだよな。ははは っ。あ、もう日も暮れてるし、帰るわ、オレ」
そんな風に誤魔化すしかなくて。
また明日と、逃げるようにその場を後にする自分がちょっと嫌になるカズである。

と。

「ちょっと待て、カズ」

ヴァーレスト家の玄関を出て庭を出て、カズが思わず深く溜息をついた時、
後ろ手にかかる声があった。
振り向くと、茄子紺の夕闇に晒されて、表情の見えないルッキーがそこにいる。

「なんだよ」
ちょっと不機嫌に、カズが答えると。
「あいつの名を呼ぶな。呼ばれて出てこられたら、困るんだよ」

ある意味、氷の魔精霊らしい、冷たいそんな声。
どういう意味だと聞こうとしたカズであったが。

そんなカズの返事などどうでもいいかのように。
後は自分で判断しろ、とでも言わんばかりに。
ルッキーは、ぷいっと背を向けて、家の中へと戻っていってしまう。

「……なんなんだよ、一体」

マーサーが、自らの別人格である、マニィと言う少女の存在を知らない理由。

それは。
カズが思っているよりも、何か大きな意味があって。
重大な秘密が隠されているのかもしれない。

だからこそ、そんなルッキーの忠告めいた言葉が、
むしろ逆効果になるってことを、カズ自身ですら、気付く事はなく……。

※　※　※

次の日。
カズはいつものように、余裕を持って早起きをして、朝食の支度をしていた。

マーサー程ではないが、カムラル家の家事全般をこなしているのはカズ自身なので、
たとえ気分が乗らない朝でも、その習慣は変わらない。

カムラル老と朝の挨拶を交わし、自らの作った朝食、
パンにサラダに目玉焼き、と言った定番の朝食を口へと運ぶ。

だが。
目玉焼きを齧った所で、カズは思わず顔を顰めた。

「うっ。裏、まっくろこげだ」
「ふむ。何か悩み事かの？　それとも、誰かと喧嘩でもしたかね？」
「いや、そういうわけじゃないけどさ」

遠からず近からずなカムラル老の言葉に、カズが曖昧に言葉を濁していると。

「よければ話してみなさい。お前が火加減を間違うのは、深く何かを考えている時だ、そうだろう？」

作り直そうとするカズを制し、カムラル老は焦げも気にせず目玉焼きを平らげると、
優しく暖かい光の灯る瞳で、カズを見つめてくる。

スクールでの授業の時や、教えを請う会員たちには決して見せないその表情。

カズは、そんなカムラル老に促されるように、昨日のことを話した。

マーサー本人だけが知らない妹、マニィの事。
その事を当のマーサーよりも、周りの弟妹やルッキー達が、心配したり気にしている。

マーサーがマニィのことを知らない、あるいは忘れていることを、悲しんでいるようにも、カズには見えた。

「出てきたら困るって、どういうことなんだろ？
マーサーが忘れているのも、その辺りに原因があると思うんだけど」
「ふむ。魂の入れ替わりし種族については、未だ謎の部分が多いからのぉ。
難しい問題じゃな。ただ、知らないのではなく、忘れているのならば、見えてくるものもある」
「それって？」

なんだろうと、カズ自身も考えながら、カムラル老の次の言葉を待つ。
カムラル老は一つ頷き、教えを説くかのように、口を開いた。

「『忘れる』という行為は、そのものが生きていくのに不可欠な要素だと言える。
人には、知識や情報を溜め込むには限界があるからの。
他に優先すべきものがあり、そのものが不必要だと判断されれば、その記憶を忘れてしまう。
また、その情報が生きていくのに支障をきたす様な場合も同じじゃな」
「じゃあ何？　マーサーにとってのマニィって」
「不要なものなのか、排除すべきものなのか、どちらかにはなるんじゃろうな」

きっぱりと、カズが言葉にできなかったことを口にするカムラル老。
もしそうなら、それはとても悲しい事だと思う。
どうにもやりきれない気持ちでいると、しかしカムラル老は、だが、と言葉を付け足した。

「それは、あくまで本人の意思で忘れている場合じゃがの」
「あ、そっか。マーサーじゃない他のヤツが、マニィの事についての記憶を封印したって可能性もあるんだ。って、まてよ。何でそんなことする意味があるんだろ？」
「そればかりは、その当の本人に聞いてみなければ、分からんのう」

しみじみと、カムラル老にそう言われて。
この事は、ただここで考えていても、これ以上進展がないんだろうなと、カズは悟った。
知るためには、知るための、行動を起こさなければならないのだ、と。

（第１１話につづく）

11、勝利の笑顔

『会ってみたい』と言ったマーサーの言葉を信じるとすれば。
弟妹たちがマニィのことを知っているのに、マーサーが彼女を知らないのは、
やはりどこか、他のものに意図が介入しているのではないかとカズは思った。

記憶を封印したと過程した場合、一体誰が、そんな事をしたのか。

昨日、意味深な発言をしていたルッキー？
あるいは、何か理由があって両親が？
それとも、マニィ本人と言う可能性だってある。

どうすればその答えを導き出せるのか。
なんだか一層、興味が沸いてきた。
なんて考えるカズであったが。

「じゃが、あまり深入りするでないぞ。誰にだって知られたくない秘密はある。
カズ、お前がそれを知ることで、今の関係が壊れることだって、あるのかもしれないのだから」
「……うん、わかってるよ」

カムラル老が真剣な眼差しでそう言うことで。
自分の中の熱が、すっと冷えるのを自覚するカズ。

それは、いつもの事。
カムラル老の、カズを思っての言葉。

今の関係が壊れるなんてこと、根拠のない脅しのようなものだ。
でも、それが最も効果的な抑止であることは、間違いなくて。

だから余計に冷静になった頭で思うのだ。
それを知ることは、カズ自身にとって何か危険を伴うような何かがあるんだろう、ということに。

「なんて、いろいろ勝手に悩んでんの、馬鹿みたいだな……」

結局、なんだかもやもやしたままの気持ちで、朝の登校時間。
カズはいつも、スクールまでの道のりの途中にある小さな公園で、マーサーと待ち合わせてスクールに向かうのを日課としている。
そこに他の友人達が加わり、一日が始まるといった寸法だった。

案の定、カズが待ち合わせの場所に辿り着くと。
背中からでも分かるくらいに、何も考えていなさそうな、陽気で能天気な、鼻歌を口ずさむマーサーがそこにいた。

歌の上手い人間特有の、嫌味なほどに正確に調子っ外れなその歌を耳にしていると、
思わず呟いてしまった通り、勝手に考え込んで悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてくるカズである。

「っつーか、なんかハラ立ってきた」
理不尽な苛立ちを、カズはそのまま口にし、カズは足音と気配を殺して忍び寄り……。

「ちょーっぷ！」
体当たりまがいの『フライング・クロス・チョップ』をかまそうとしたが、
当のマーサーは、全くもって自然な動作でひょいと体を逸らし、足だけをその場に残す。

「うわっ、うわわぁーっ！」
虚をつかれたカズは、ものの見事にマーサーの足に引っかかり、そのまま前のめりに地面とお友達になりながら、転がっていって。

「どわはははっ」
すぐに聞こえてくるのは、心底楽しみました、といった風のマーサーの笑い声。

「……っ」
仕掛けたのはこっちが先なのだから、
結果こうなってしまったのは仕方ないと言えば仕方ないことなの

だが。

どうしてかその時カズが感じたのは、怒りや悔しさの混じった、でもなんだか別のものだった。

思わずぎん、と睨みつけるカズ。

「怒んないでよ〜。先に仕掛けたのは、そっちでしょ？」

だが、マーサーはそんなもっともな言葉とともに、見ただけで百年の怒りもお構いなしな、随分とやる気の殺がれるような笑みを浮かべるばかりで。

「あ〜あ、ほこりだらけだ。まー、泥だらけになるよりはいいけど」

呟きつつカズを立たせると、それが当たり前のことであるかのように服の埃を払い、髪を整える。

多分、マーサーにとってカズは、弟妹たちと対して変わりはしないのだろう。

それは、癪な事ではあったけど。

はたかれて舞う埃と一緒に、昨日のもやもやした気分とか、今さっき感じた怒りのようなそうでないような、変な感情もどこかへ飛んでいってしまうから、

不思議だった。

ついでに、触れられている所からどんどんと熱を帯びてくる。

「よけるんじゃねーよ、バーカ！」
「だったらせめて、襲い掛かる前の掛け声やめればいいんじゃないの？」

にっこりと、マーサーは笑う。
それなら避けないで食らってやろうとでも言いたげに。

「おぼえてろよ」

カズのそんな呟きが、届いているのかいないのか。
それでもやっぱり、マーサーは笑顔のままで……。

それから。
他の友人達とも合流して、いつもの授業が始まって、今は昼休み。
いつもなら、マーサー通じて仲良くなった他の友人達も一緒になってお昼を食べるのだが、
都合が合わず、カズは随分と久しぶりに、マーサーと二人きりで、お互い自作の弁当をつついていた。

「ねえカズ、この前、仕事したいって言ってたよね？」
「ん？　ああ。そういえば言ったっけか」
何気ない雑談の合間に、不意に発せられるマーサーのそんな言葉。
「やりたいのは山々なんだけどよ、ギルドのほうに、じいちゃん手を回したらしくてさ、
顔見ただけで、ご遠慮ください状態なんだよなー」
カムラル老はとにかく過保護だった。
カズに女装をさせたがる以上に、カズに周りにある危険を排除……いや、
そういうものに興味津々で近付きたがるカズに、最早職権乱用の域で目を光らせていた。
だから、町の喫茶店で給仕をする、なんてごく普通の仕事ですら断られる始末。
できる仕事といったら、恥ずかしい女装姿での、
カムラル老の仕事の補佐（詐欺まがい）しかなかったのだ。
「それなんだけどさ、僕、いいこと思いついたんだ。放課後、ちょっといい？」
「別に、いいけど？」
マーサーから、こんな風にカズだけが誘われるのは初めてのことだった。
大抵カズが引っ張り回すか、他の友達と一緒か、歌に釣られてよってくるとか、

そんなことばかりだったから。

「なんだ、いい案って？」

「後でね。直接そこで説明したほうが早いと思うし、ちょっと準備がいるんだ」

なんだか悪巧みを思いついたかのような、笑顔を見せるマーサー。

もったいぶる感じが、余計に気にかかるのも確かで……。

（第１２話につづく）

12、仮面

気もそぞろのまま、午後の授業を終え、そして放課後。

カズとマーサーは、ユーライジア元町にある冒険者ギルドの建物、そこに行き来する、仕事を委託する人、仕事を受けに来る人たちがよく見える場所へとやってきていた。

「わかった？　いい案でしょ？」

「わかるか！　いきなりそりゃねーだろ！」

それを見ながらいきなりそんな事を言われ、当然カズには訳が分からなかった。

すかさずつっこんでやると、マーサーはちょっと首を傾げて、それに答える。

「ほら、よく見て。残念そうな顔して出てくる人、結構いるでしょ？」

「ふむ」

「僕、ちょっと話聞いてみたんだけど、ギルドって、全ての人のお願い、

聞いてるわけじゃないみたいなんだ。やって欲しい仕事をお願いしても断られること、

結構多いんだって。うちで引き受けるほどの仕事じゃない、とかなんとか。だから……」

微妙な言い回しではあったが、マーサーの言いたいことはわかった。
つまり、ギルドで受けてもらえなかった仕事……残念そうに肩を落とし、
帰ってゆく人たちに声をかけ、交渉を持ちかける、そういうことなのだろうと。

「そのギルドのやつらが受けなかった仕事を、横からかっさらっちまおうと、
つまりはそういうことだな？」
「うん、そう」

オイオイ、あっさり頷くなよ、なんて内心思うカズであったが。
事実言葉通りと言えばそうなのかもしれない。

しかし、確かにいい案ではあるが問題はいくつかある。
ギルドがその仕事を断ったということは、大なり小なりその仕事には断った理由があるということだし、やっぱりカズ自身の顔が割れてしまっていて、下手に動くとカムラル老に自分の行動が伝わってしまう可能性もあったからだ。

自分から檻を飛び出すような行為をしようとしているくせに、
余計な心配をかけたくないというのもムシがよすぎる話ではあるが。

少なくとも、その点においての安心がなければ、いくら興味深い

マーサーの『いい案』とはいえ、
そう簡単に頷けるものではなかった。
だから、それについてどう考えているのか、マーサーに聞いてみると。

「最初はさ、こっちも話は聞くけど、それだけで仕事を引き受けるわけじゃなくてさ、
仕事の内容を聞いてみて、受けるか受けないか判断しても遅くはないんじゃないかなって思うんだ。　で、二つ目の問題点についてなんだけど、さっき、準備するって言ったでしょ。
ほら、僕、これ使えばいいかなーって思ったんだ」

そう言って取り出したのは、初夏のこの時期、少し暑苦しい気もしないでもない、
大きめの夜色マントと、一風変わった夜会にでも使いそうな極彩色の仮面だった。
それらには、ほんのわずかだが、魔力を感じ取ることができる。

「なんだ、それ？」
「家にあった魔法玩具だよ」
カズの問いに、ちょっと見ててねと呟き、マーサーはマントを羽織り、仮面を取り付ける。

「これさ、声色が変えられるんだ。後ね、マントに軽い『視覚補正』ってやつがかかってて、
これ着てれば、背が大きく見えるらしいよ？」
「うおっ？」

いつも聞き慣れたマーサーの声とは違う、低く芯の通った、
耳ではなく胸に直接響くようなアルトの声が届き、
カズはあまりの変わりように思わず仰け反ってしまった。

マーサーの歌声も、胸というか、心に直接触れるような声ではあるが、
それとはまた違った趣の、一度耳に入れたらずっと残るような声色である。

「ね、結構変わるでしょ？」
「いやうん、驚いた。『風（ヴァーレスト）』の魔法の中にそんな魔法あったのは覚えてるけど、
これ、おもちゃってレベルじゃねーんじゃねーの？　普通に高そうな魔法具（マジックアイテム）に見えるんだけど」

使用目的とか、効果は置いておくにしても。
これは魔法屋に並んでいる魔法付加の施された品に匹敵するんじゃないのかって、カズは思った。
少なくとも、一般人がおもちゃ感覚で扱えるシロモノではないだろうと。

売ったらいくらくらいになるんだろう。
なんてことを内心思いつつも、カズは言葉を続ける。

「ま、それは後でいいや。確かにそれ、使えそうだな。仮面っていうのはちょっと怪しい気もするけど」
「しょうがないよ。正体バレたらだめなんだし。後は、カズの交渉次第じゃない？」
そう言って笑い、マントと仮面を取り外し、カズに手渡す。

「あ、でも、一つしかないんだな。それはどうするんだ？」
「ん？　どういうこと？」

カズがそう言うと、言葉の意味が分からないのか首を傾げるマーサー。

「や、だからさ、一つしかなきゃどっちか変装できなくて困るじゃん」
「えーっと、ああ、そっか。言ってなかったけ？　僕、これから別の仕事なんだ……一応正規のやつで」
「な？　てめっ、聞いてねーぞっ！」

てっきり、二人でこの『いい案』を決行するつもりだったカズは、そんなマーサーの言葉に思わず憤慨する。
それを聞いたマーサーは、珍しく困った顔をして。
「ごめんね、カズ。実は前々から今日は『白猫亭』で歌を歌うこ

とになってて……
そうだよね、いくらなんでも一人でやるなんて嫌だよね。いったん出直す？
明後日なら空いてるよ？」

本当に真摯な声色で、謝ってくるマーサー。
それだと逆に、カズのほうがいたたまれなくなってくるというか、別にマーサーはそういうつもりで言っているわけではないのだろうが。
初めから二人でやると思い込んでいたことも含めて、
カズは、自分がマーサーと一緒じゃなきゃ何もできないヤツに思えて……
なんだかそれは、癪に障った。

「いや、別にいい。それならオレ、一人でやる」
「そう？　じゃあ、気をつけてね。明日、どんな仕事したのか、教えてね」
「ああ」

むすっとしてカズがそう言うと。
マーサーは優しい笑みを浮かべ、大きく手なんぞ振りつつ、その場を去っていってしまう。

そんなマーサーに軽く手を上げ見送りながら。
自分で思っている以上に、マーサーに依存しているのかもしれないなぁ、
なんて、年不相応なことを考えてしまうカズなのだった。
その感情の正体に……未だ気付くことができないままに。

（第１３話につづく）

13、フォーカス

さて、その後。
マーサーの『いい案』を、早速実行してみたカズであったが。
世の中、思った通り簡単にいくはずはないと。
長期戦になるだろうな、なんて覚悟したのも束の間。
すぐにギルドの赤いレンガ造り入り口から、いかにも仕事の引き受けを断られたと分かる少年が姿を現した。

「くそっ、頭の固い奴等めっ！」
何やら不満たらたらで、ぶつぶつ呟きながら歩き去って行くのを見て、
カズはしめたと思い、いきなり声をかけても目立たない裏通りの方へと回りこみ、
背中越しに声をかけてみる。

「そこの、『ハイクラス』のお兄さん、ちょっといいかい？」
「……っ」
首に紐を通し、何か黒い箱のようなものを抱え持っていた少年は、名乗ってもいないのに自分のことを知られているような気がして、ぎょっとなって振り返る。

「だ、だれだっ、どうして俺のことをっ」

振り返ってみれば、そこには派手派手の仮面、夜色マントの怪しい人物がいる。

よほど豪胆なものでもない限り、驚き警戒して間を取るのは当然のことだろう。

だが、少しでも自分のことを知っていると匂わせ、こちらに興味を持たせる、

そんな策は、成功したと言えた。

少年がユーライジアスクールの、カズたちより二階級上のハイクラスに所属している人物だと分かったのは。

その胸元に光る、ユーライジアスクールにおいて、

ハイクラス以上のものが身につけることを許される、『ライジア・バッチ』が目に入ったからで。

よく観察すれば分かりそうなものだが、相手はカズの都合のいいように反応してくれているので、カズはそのまま話を続けることにする。

「初めまして。オ、私は……そうだな。『夜を駆けるもの』とでも呼んでもらおうか。

しがない『何でも屋』さ」

せっかくだし、別人に扮してみるのも悪くない。
カムラル老との仕事で演じることに比較的慣れていたから、早速気分を入れて会話してみる。

名乗った名前は、自然とカズの口をついて出たものだった。
それは、いつか二代目『夜を駆けるもの』として活躍したい、何て思っていたせいもあるだろう。

「お兄さん、先程ギルドに仕事の引き請けを断られていただろう？
もし良ければ、何か手助けができるんじゃないか……そう、思ってね」

カズは第二の策として、相手に冷静に状況を考える暇を与えずに、自身の意図を一気に畳み掛ける。

仕事の引き受けを断られた、ということについても、
普通ならその様をつぶさに観察してる奴がいる、などとは考えないだろうから、
どうして知っているんだ？　ということになるだろう。

それで、誘いに乗ってくるかどうかは、後は賭けだった。
これで断られるのなら、それならそれでいい。

しつこいのも逆に怪しまれるだけだし、ドキドキするような冒険の気分が味わえるような仕事とか、してみたいとは思うカズであるが。
何が何でも、とがっついているわけでもない。

駄目なら駄目で、次を当たればいい。
その程度の気持ちで、カズはいた。

「なんだあんた。そんなことまで分かるのかよ……そ、そうだよ。せっかくこの俺が、世紀の大発明を使って紙面を盛り上げてやろうというのに！」

と、そんな無欲がよかったのか、それとも誰かに愚痴を聞いてもらいたかったのか、
少年はちょっと怒った様子で語りだす。

「紙面？　ああ、スクールの新聞部の人なんだね」
「おお、そうだとも。俺はこの広大なスクールにおいて、生徒達みんなが面白おかしく、興味深い、平等で公平な情報を得られるようにと邁進している！
だからこの大発明『キャメーラ』で、建国祭会場視察のために、お忍びで滞在しているという噂の、他国の麗しくも美しい姫君たちの御姿を激写しなければならないのだっ！」

知らない人だと思っていたが。
そう言えば、ユーライジアスクールにそんなが部あったなぁと思い出すカズ。

スクールに入学したばかりの頃、その人たちが、なんだかよく分からないけどバレバレな身の隠し方で、周りにたくさんいたのも思い出したのだ。

彼もきっとその一人なのだろう。
彼が言う通り（カズもスクールのいろんな情報とか噂話が好きだったから）、
来年行われる、ユーライジア、サントスール、アーヴァイン、ガイアットの四国同時主催の『建国祭』の顔合わせ兼打ち合わせために、各国の王族たちがユーライジアスクールへとやって来ていることはカズも知っていた。

「流石新聞部。情報が早いね。そのことは、一部の王族しか知らないはずだが」
「まあな！　俺はユーライジア四王家とも強い繋がりを持っているのだ」

本当かな、と思ったが、口には出さない。
四王家には、彼のような人はいないはずだった。
もしかしたら、カムラル教会の会員生、という可能性はあるかもしれないが。

「この繋がりを駆使し、いつか俺は彼女のうつった『絵』を手に入れるのだ！」
喋っているうちに熱が篭ったのか。
手に持つ黒い箱を掲げながら何やら叫んでいる。
本当に強い繋がりとやらがあるのなら、ここまで傾いた人物のこと、

知らないはずないと思うカズであったが。

それよりも、彼の持っているその黒い箱は気になった。

少なくとも、世界の英雄一歩手前……候補生であるハイクラスの生徒であると証明しうるそれは、カズの目から見て、今身につけている仮面より、強い魔力を秘めたマジックアイテムであることがわかる。

おそらく、それがさっき彼が発明した、と言ったキャメーラなるシロモノなのだろう。

「それがお兄さんが発明したと言うキャメーラなのかい？一体それは何をするものなのかな、よければ聞かせてくれるかい？」

「ああ。これはな！　『光（セザール）』の魔精霊の力を借りて、この『目』に映ったものを、まるで絵画のように切り取ることができるものなんだ！」

「それは……すごいな。どうやって使うのかな？」

「よし、実践してやる。　ちょっとあんた、持ってみてくれ！」

思わず感心してそう呟くカズに。

青年は、得意げな様子でキャメーラを手渡すのだった……。

（第１４話につづく）

14、Thankful

「よし、実践してやる！　ちょっとあんた、持ってみてくれ」
言葉通りのものならばと、感心して声をあげるカズに。
得意げな様子で青年はキャメーラを手渡す。

「裏側の真ん中、上辺りを覗き込んでみてくれ、『目』によって、反対側が見えるだろう？」
「お。本当だ」

言われた通り覗き込むと、確かにキャメーラ越しに少年の姿が見える。

「で、左の角の巻きでピントを……って、それは今はいいか。
あんたの目で、俺の全身が『目』の中に入るようにして、右の赤いボタンを押してくれればいい」
「分かった」

カズは、言われた通りの動作をこなしおもむろにボタンを押す。
すると、ピカッとキャメーラが発光し、しばらくすると箱の下の部分から変な音がして、
ひらりと一枚の紙が出てきた。

そこには彼の言葉通り、まるで空間を切り取って縮小したかのよ

うに、
彼自身と、その背後にある周りの景色が写っていた。
「……すごいね。これをお兄さんが発明したのかい？『シャレード』や『ズイウン』にも匹敵する大発明じゃないかい？」
人の何倍も早く走れる、魔法移動機械の『シャレード』。
鳥のように空を舞うことのできる『ズイウン』。
『金（ヴルック）』属性の魔法技術により、マジックアイテムの種類も効果も、格段に進化してきているが……それらの中でも、大発明と言われるものと比べても遜色ないものに、カズには思えた。
おそらく、このキャメーラは、これから爆発的に世間に広がっていくだろう。
そう考えて、正直に賞賛したカズあったが。
言われた当の本人である青年は、あっけに取られたようにぽかんとしていた。
「はは、そんなこと言われたの、初めてだよ」
そして、とても嬉しそうにそう呟く。
「お兄さん、名はなんて？　良かったら教えてもらえないかい？」
「カワダ。カワダ・フレンツだけど」
その名をカズが知ることによって、それがカムラル老に伝わり。

カズが思った通りに。
キャメーラがユーライジアの人たちにとって当たり前のものになるなんてこと、
その時はお互いに思いはしなかっただろう……。

そして。
お互いに不思議なほどに打ち解けて、当初の本題である仕事の話になった。

「それで、このキャメーラでギルドに何を頼むつもりだったんだい？」
「ああ、さっきも言った通り、祭りのために各国からやってきた、一般人では話すのもままならないお姫様たち……じゃなかった。王族、それぞれの国の、祭りの代表者たちの姿を取りたかったんだ。
それを新聞に載せれば、みんな興味を持って新聞、見てくれるだろう？
だが、そうは言っても相手は王族だ。コレのことを理解してくれる人は少ないだろうし、
よくて門前払いがオチだ。だから、ギルドに頼もうと思ったんだけど」

理解さえしてくれず、結果はこの通り。
つまりはそういうことなのだろう。

だが、ギルドの言い分も分かる。

このキャメーラが未だ知らない人にとって得体の知れないものである以上、
下手をしようものなら国際問題になる、なんてこともあるかもしれないからだ。
まあ、ギルドもそこまで考えた上で断ったわけではないだろうが。

ならば逆に、同じ立場の者同士が話し合えば？
今、カワダがしたように、ちゃんと使い方を説明すれば？
この時を止め、空間を切り取った『絵』を、とらせてもらえるかもしれない。

いや、その時カズは既に、キャメーラの魅力にとりつかれていて。
この仕事、やってみたいと、そう思っていた。

「ふむ。そうか。それなら……もし、良ければという提案なのだが、
この仕事、私に任せてみないかい？　これは私のお願いだから、当然お金はいらないよ。
まあ、お兄さんの大切なキャメーラをこの私が預かるということをお兄さんが許してくれれば、だけれどね」
「って、どうやって？　王族の人たちはスクールのどこにいるのかも分からないんだぞ？
しかも、普通の奴が……って、あんたはそれ以前の問題だけど、会わせてくれるだろうか」
「その点については問題ないよ。場所は宛がある。私なら会うことも可能だ」
「本当か？」
「本当だとも」

自信たっぷりのカズの言葉。
その自身には実は根拠はあまりなかったりするのだが。
自分も一応王族みたいなものだし、場所の目処もついている。
会わせてもらえなくても忍び込めばいいじゃん、くらいにカズは思っていた。

カワダはそんなカズに戸惑っていたが、やがて顔を上げて。
「あんたは俺のキャメーラを認めてくれた初めての人だ。あんたになら、預けてもいいと思ってる。お願いしても、いいかな？」
駄目もと、くらいに思っていたカズの予想に反して。
カワダはそんな事を言って、キャメーラを手渡してきた。
こんな、顔も正体も隠した怪しい奴に、よくもまあそんな気になったなぁと、
自分自身で思わなくも無いカズであったが。
それでも、信用されてると思えるのは、なんだか嬉しかった。
ぜひこの仕事を成功させて、その信用に報いたいと、カズは思う。

「ありがとう。その信頼に、全身全霊を持ってお答えするよ」
だからカズは、そんな意思を持った言葉で。
カワダの仕事を引き受けることを、承諾したのだった……。

（第１５話につづく）

15、Twinkle, Twinkle

そして、その日の夜。
カズはあっさりと、スクール内に侵入していた。

思い立ったが吉日、ということですぐさま行動を開始したのは、今日がちょくちょくある、カムラル老が家にいない日だった、ということもある。
国の仕事か何かで、今頃は大陸ひとつぶん離れた『ラルシータスクール』に向かっているはずで。

スクール内への侵入方法は、実に簡単なものだった。
いや、それは侵入というのとは少し違うのかもしれない。

カズは、カワダと別れた後、すぐにスクールに向かった。
そして、普通に仮面を外し、カズ自身ユーライジアの生徒として入り、そのまま帰らなかった。
それだけなのである。

とはいえ、校舎内に残っていたならば、下校時刻になる頃には誰かに見咎められていただろう。
だがカズは、校内の敷地内、そのうちの、監視の届かない場所、野生の動物や魔物たち、果ては魔精霊の棲まう場所……今では『虹泉』があって、
実習でもない限り、特にリトクラスの生徒たちなんかは危ないから行ってはいけない、
『グラウンド』で待機していたのだ。

行ってはいけないと言われれば行ってみたくなる。
そんなお約束の感情とともに、カズは冒険と称してすでに自分の庭であるかのように遊んでいたので、もう慣れたものである。

下校時刻が過ぎ、常勤の者や、校内の施設で一晩過ごすもの以外が家路につく頃を見計らい、
カズは、仮面とマントを再び纏って、降り始めたばかりの闇に紛れながら、校舎へと近付く。

カズが、これから向かう場所は決まっていた。
カズ自身、他国の王族たちがどこにいるのかは知らない。

だが、それを間違いなく知っているだろう人物の居場所は知っていた。

そこは、『生物室』と呼ばれる場所。
そこにいる主は、この学校の主みたいなもので。
分かる大人でもあるから、事情を話せば、それに乗ってくれるだろうと、カズはふんでいた。

グラウンド地帯から校舎のある区画へと続く虹泉をくぐると、その足ですぐさま生物室へと向かう。　忍び足で音を立てずに近付き、それでも堂々と生物室の扉をを叩く。

返事は無かったが……何かの気配はあるようだった。

幸い鍵がかかっていなかったので、カズがゆっくりと扉を開けると。
まず目に入ったのは、たくさんの檻。
魔物や魔精霊たちを閉じ込める、魔法の檻だ。

そのうちのいくつかの檻の中には、カズの気配に気付いて顔をあげ、
鳴き声をあげる『獣型』の、種々様々な魔精霊たちの姿が見える。
スクールの敷地内にあるグラウンドは、基本的に自然のままにしておくのが基本ではあるが。
それでも大怪我をしたものとか、いろいろ問題のあるものが、
一時的にここに置かれていると聞かされていた。

ただ、別にずっとこのままではなく、元気になればグラウンドに帰れるし、
相性が合うものがいれば、自分の従属魔精霊（パートナー）として引き取っていく生徒もいるらしい。

炎トカゲのラルマンド。
癒しの術を使う海月みたいなリカバースライム。
毒をもつ大ネズミのナクデス。

カズが近付くと、みんな寄ってくるので、一声かけながら部屋の真ん中を歩き、
そのまま奥にある、一番大きな檻の所にやってくる。

それは、他の檻とは魔法耐久レベル一つとっても桁の違う、強力な檻だった。
物理的にも、魔法の力によってでも、カズにとっては到底破れそうもないシロモノである。

その中は、ちょっとした祭壇のようになっていて……さらにその奥に、
『虹泉』の虹色の渦があるのが分かる。

祭壇のようなものの真ん中には、複雑な魔法文字の刻まれた、
それ自体も強力な結界となる絨毯があり、その魔あるものを封じ込める結界の上で、
無防備にも寝こけていたのは。瓜二つの姿をした、水色の髪の少女たちだった。
双子であるらしいその少女を見分ける術は、髪に巻かれた色違いのバンダナのみ。

「おーい、アオイ、ヒスイーっ！　そんなとこで寝てたらカゼひくぞー」

カズはちょっと呆れたように、大きめの声で、そんな二人の声をかける。
とはいえ、内心ではここにいてくれて一安心な部分はあった。

もし部屋に戻られていたら、この広大なスクールの中、
目的の人たちを自力で捜さなければならなかったからだ。

「……んん？　あ、カズちゃんだょ～」
「ふわぁ……おはようございますぅ、カズさん」

呼ばれた少女たちは、同じような仕草で起き上がり、そこにカズがいるのを知って、にっこりと笑う。

「おはよーじゃねーぞ。いてくれて助かったけど」

二人……アオイとヒスイに知り合ったのも、当然スクールに入ってからではあるが。
一見、人の姿をしている彼女たちは、正しくは人ではなく、『人型』の魔精霊である。

その中でも彼女たちは、かなり高位の魔精霊だった。
おそらく、その意思さえあれば、この檻から出ることも、簡単なことなのだろう。

だが、彼女たちが自らの意思でここにいるのは確かだった。

ユーライジア四王家筆頭である、エクゼリオ家の跡取りである、マイカ・エクゼリオ。
魔精霊の最高位、根源に次ぐ、『神型』と称されてもおかしくない力をもった、魔精霊の少女。

そんなマイカのために、彼女たちはここにいるのだと、カズは知っていた。

「こんなとこで遅くまで何してたんだ？　マイカはもう、部屋に帰ったのか？」
「ううん。いまね、マイカさまね、他の国の王族のひとたちにあいにいってるょ」
「それで、マイカさまの力をおさえる必要があったので……」
カズの問いにアオイは首を振り、説明するように、ヒスイが付け足す。
カズにはみなまで言わず、二人の言いたいことが分かったので。
「二人は疲れて、ここで寝ちゃったってわけか」
なんて、相槌を打つと、二人は同じ顔をして……はにかんだ。
人の姿を模すことのできる魔精霊なのだから、年齢的にも二人のほうが上なのだが、
見た目とか雰囲気のせいもあり、どうも同じか年下のような感覚を受けるカズである。

そんな二人が寝こけていたのは、それが正しく彼女たちがここにいる理由であると言えるだろう。
それは、マイカ・エクゼリオと言う少女が、この檻の中と、目の前にある虹泉の向こうにある、
『理事長室』でしか暮らせない体質にあった。
昔はそうじゃなかったし、どうして暮らせないのか、までは聞いていないが。
しかしそれでも彼女は一応このスクールの最高責任者であり、

どうしても外に出なければいけないこともある。
その時に、高位の魔精霊であるアオイとヒスイに頼み、
外に出ることのできる強力な『魔法』をかけてもらうのだという。

それは、カズがいまだ知りえない、たいそう強力なものらしく、
おかげで二人は疲れ果てて……気付いたら寝てしまった。
つまりはそう言うことなのだ。

「アオイとヒスイは、それでマイカがどこに行ったのか聞いてるのか？　ちょっと用があるんだけど」
マイカが他国の王族の人たちと会っているのなら、ちょうどよかった。
そう思って、カズが聞くと。

「どうしようもない女ったらしのおやじと、くまみたいな男女にあいにいくっていってたょ」
「ちょっとアオイちゃん、それじゃ分からないよ。たぶん、お客様用の部屋のある区画にいらっしゃると思いますけど……」
おそらく、マイカの言葉をそのまま覚えて反芻したらしいアオイと、
それを補足するように、答えてくれるヒスイがいて。

「教えてくれてありがとな。んじゃちょっと見てくるわ」

カズは礼を言い、またな、と声をかけて、部屋を後にする。

「……この仮面、バレバレなんじゃねーのか？」

別にマントも仮面も外してないのに、どうも自分が筒抜けらしいことに、首をひねりながら……。

（第１６話につづく）

16、ミラージュ

そうして、カズが目的地……来賓用の居住区、客室に向かう途中。

「ん？　何か外がさわがしいな」

ふいにざわつく気配に気がついて。

もうすっかり闇に染まった校舎の外を廊下脇にある硝子窓から見やると。

全身を緑の鱗に覆われた、巨大な生き物……『ビリディアン・ドラゴン』が三匹、

地響きをたて、見下ろす硝子窓の向こうを通り過ぎていくのが分かった。

ビリディアン・ドラゴンは、スクールの敷地内に生息する魔物の中では特に危険な魔物であり、

いくらドキドキや冒険が好きなカズだと言っても、それらと無茶無謀が別物であることは分かっている。

ただ、校舎の中にいれば魔物たちが入ってこないことも分かっていたので、

このままここにいれば無用な危険は回避できるわけなのだが……。

「なんでこんな時間に外出てるんだよっ！」

思い切り自分を棚に上げつつ、カズは踵を返して出口へと走った。
その理由は口にした通り、誰か……少女らしき人物が、
そのビリディアン・ドラゴンに襲われているのが分かったからだ。

転がるように校舎外、背の高い草の生い茂る荒れ果てた庭に出ると。
それらに視界を隠され、悪戦苦闘しながらも、駆け出しつつ魔法詠唱のための呪を紡ぐ。

「『火（カムラル）』よ！　幻想の徒に仮初の息吹をっ……【フレア・ミラージュ】っ！」

そして。
力込められた言葉が生まれ出た瞬間、突然闇夜に小型の太陽が出現し。

ボン！　と音を立ててそれが破裂したかと思うと。
そこから炎を纏いし三つ首の犬が、一つ目の巨人が、八つの頭を持つ大蛇が次々と飛び出した。

いや、飛び出したというのは物理的におかしいのかもしれない。
何せ、その一体一体が、ビリディアン・ドラゴンのゆうに二倍はあるのだ。

「ギギッ！」

その大きさに圧倒されたのか、ビリディアン・ドラゴンたちは、
その意識を炎の幻獣たちへと逸らす。

「こっちだ、早くっ！」
カズはその隙に、ぽかん、としている少女の手を取り、
その手のひらの感触に不思議な違和感を覚えつつも、その足で校舎へと戻っていって……。

「大丈夫か？」

あらためて、カズはそう声をかけてみる。

「え？　あ、うん。ボクはだいじょぶけど……あれ？」

自分のことよりも、ドラゴンと炎の幻獣たちの戦いが気にかかるらしい。
だが、校舎に戻り、窓越しに覗くと、そこには幻獣たちの姿はなく、
どことなしに視線を彷徨わせ、きょろきょろとしているドラゴンたちだけがそこにいた。

「あれ、もうやられたの？」
「……違う、そもそもあれはただの幻だ」

危ない目にあった、と言う感覚はまるでないらしい。
予想していた反応と異なる様子の少女に、カズはちょっと戸惑いつつも、
憮然とした口調で言葉を返す。

あの炎の幻獣たちは、カムラル老と詐欺まがいの仕事の時に使った魔法と同じである。
炎が生き物の姿を象り、意志を持ち動いているように見えるが、
実際は熱すらほとんど感じられない、はったりの魔法であった。

「まぼろし？　なんだ、にせものてこと？　つまんないのー」

まるで夢の世界から出てきたかのような白一色の夜着を包むのは、
長い、腰ほどまでもあるカールのかかった亜麻色の髪。

気高さと儚さの同居した立ち振る舞いの少女だが、少し生意気……というか、口が悪い気がする。
ついでにその話し方もどことなく不完全というか、個性的な感じが滲み出ていて。

本来なら全力で自分を棚に上げて売り言葉に買い言葉、そこまで言うなら本物を呼んでやる、
なんて気分にもなるカズであったが。

それより何より、目の前の彼女にはカズが大いに興味を引かれる点があった。

「つまんないってお前自身だってにたようなものだろ？
初めてあったな、お前みたいな触れられるほど強力なゴーストは」
校舎内に明かりがなかったこともあり、窓から届く月明かりに、
目の前の少女は見事なまでに透けて見えていたのだ。

「ご、ゴーストじゃないっ、ゆーたいりだつ、してるだけだもん
……あっ」

すると、ムキになって否定してきたかと思うと失言してしまった、
といった風に、慌てて口元を押さえる少女。

「ゆーたいりだつ？　って、『死霊術（ネクロマンシー）』の？
すげえなお前、そんな高度な魔法、使えるのか？」

『闇（エクゼリオ）の根源に類する、死霊術。
ユーライジアでは、あまり知られていない種類の魔術、あるいは
魔法だが、
その魔法は生き物の魂を扱うことに長け、死者を操ったり、
無機物（人形とかぬいぐるみとか）に魂を宿らせ動かしたりする
ことができるものである。

その中でも、『幽体離脱』は……特にレベルの高い魔術だといえ

よう。
自らの……あるいは他人の魂を肉体から剥離し、自由に移動できるようにする力。
しかも、彼女は幽体でありながら、触れることができるほどに具現化している。
年のころは、カズと同じくらい、だろうか。
その事に、カズは、感心して声をあげるが。

「あ、あの、今の聞かなかたことしてよ、お願い！　じぃに怒られるよ！」

少女は、とても焦った様子で、そう言ってくる。
その言葉は嘘ではないのだろう。
そんな少女に妙に親近感のわいたカズは、こくりと頷いて。

「それはべつにいいけど……お前、このままじゃ、すぐに気付かれるぞ？」

さっきから気になっていたことがもう一つあったので、カズはそう言葉を返した。
それは、彼女が全身から絶えることなく沸き立つ、魔力の奔流である。
『幽体離脱』のことは詳しく分からないが、そんな煙や湯水のように、
魔力を放出しっぱなしにしている人なんて、普通の人間にはありえないことだからだ。

彼女を最初、ゴーストだと思ったのもそのせいだし、
ドラゴンたちが彼女を追いかけてきたのも、彼らの縄張りに、そんな状態で足を踏み入れたからなのだろう。

スクールに入って、最初の実践授業の時に、マーサーがいきなり歌いだして、
似たようなことをやっていたので、カズはそのことを充分すぎるほど、身にしみて分かっていた。

「え、え？　何のこと……？」

しかし当の少女の方は、言われている意味が分からないようだった。
もしかしたら、その魔力の奔流が見えていないのかもしれない。

しかも、心なしか、透けている度合いが増しているような気もする。
マーサーの場合は、口を塞げばすむだろうけど、彼女自身がそれを意識していない以上、
自分でそれを止めるのは難しいのかもしれなかった。

「仕方ねぇな、ちょっと待ってろ」

カズは一つ溜息をつくと、とりあえず仮面を取る。
そして、後ろにくくってあった目の前の少女よりも長い髪から、
三角架を模した髪留めを外し、少女に手渡した。

「これ、やるよ。魔力の制御の力が込められてる」
本当は、『お前は人より魔力が多いから』と、昔カムラル老にもらったものだが。
別にこれ一つではないし、魔力の制御ならもうお手の物だったので、
友達にあげた、ということにしておけばいいかな、くらいの気分だった。

「ふ、ふわぁ」
だが、目の前の少女は、それを受け取りもせず、ただぽかんとカズのことを見ている。
というか、じぃっと視線を固定して、外してくれなかった。

「な、なんだよ……」
気圧されて、カズがそう言うと。

「すごい、すごいきれい！　ボク、あなたみたいなきれいな子、はじめて見た！」
嬉々とした様子で、そんな事を言ってくる。
「ち、ちょっと待て！オレは男だっ！　男に向かってキレイとか言うなっ！」
「えー？　そなの？　別にいいじゃん。きれいなものはきれいな

んだし、うは、もて帰りたーい！」
「うおっ、ちょ、やめろっ！　あ、あだだだっ！」
言っていることはマーサーと同じように思えなくもないが、意味は大分違うらしい。
獲物を捕らえるかのように、目にも止まらぬ速さでカズをぎりりとさば折り……
いや、抱きしめたかと思うと、その華奢な腕で易々とカズを振り回す。
知らないやつ同士だから面を外してもいいだろうと油断したのがいけなかったのか。

「……きゅう」

見た目には微笑ましい光景に見える中。
カズが強烈な圧迫と回転に目を回して、そのまま意識を手放すのに。
さほど時間はかからなかっただろう……。

（第17話につづく）

17、ラ・フィエスタ

「……っ」

一体どれほど意識が飛んでいたのか。
はっとなってカズが目を覚ますと。
ちゃっかり髪留めを付け終えている少女の申し訳なさを含んだ笑顔が、目の前にあった。

「ごめんね？　いつもよく怒られるんだよねボク。お気にのおもちゃとか、すぐこわしちゃうの」　「な、何！」

その言葉に青くなり、カズはがばっと起き上がって慌てて胸元にある『キャメーラ』を確認し、
とりあえずどこも壊れていなさそうなのを見て、ほっと息をつく。

気に入られたものがカズ自身であることに、気づいていないのが、カズらしいといえばカズらしいのかもしれないけれど。

「ね、それなに？」
「これか？　これはキャメーラっていうマジックアイテムで……」

カワダから説明されたのと同じ説明をカズは少女にしていく。
すると、少女の表情がぱっと明るくなって。

「それ、すごくおもしろそう！　ねね、ボクもとてよ！」
「だ、ダメだって、コイツは使用回数に制限が……って、まてよ。お前、もしかしたら、ガイアットの姫、とかじゃないよな？」

カズはそこでようやく当初の目的を思い出した。
確か『死霊術』は、ガイアット王国に広く広まっているものだったから、
もしかして、と思ったわけなのだが。

「ううん。ちがうよ。ボクはサントスールから来たの。あ、そだ。ボクまだ名乗ってなかたね。
ボクはナナ。ナナ・サントスールっていうんだ。ガイアットじゃなくて、サントスールのお姫さま、だよ」

そんな、思いもよらぬ答えが返ってくる。
つまりこれは、期せずしていきなり目的を果たせてしまうということになるわけで。

「ホントか？　なら話は早いな。オレはお前に用があってここに来たようなもんだからな」
「そうなの？　えと……」
「あ、悪い、オレはカズ。カズ・カムラルだ」

ナナに倣ってカズも名乗ると、ナナはその名前に覚えがあったらしい。
「カムラル？　って、ユーライジア四王家のカムラルさんだよね

？　じゃ、カズちゃんもお祭り参加するの？」
何だか嬉しそうに、そんな事を聞いてくる。

「お祭り？　ああ、『建国祭』のことか？」
「うん、その中でさ、ユーライジアと、サントスールと、ガイアットと、アーヴァインの四つの国の代表の子供で、『魂の残滓』集めのお祭りあるでしょ。ボク、サントスールの代表、なんだよ！」
「へぇ、すげえじゃん。それってすごく名誉なことなんだろ？」

しかも、その『お祭り』の相棒として、神と称される『神型』の魔精霊を特別に呼ぶらしい。
カズでなくても、是非参加したい、建国祭の最大の催し物であるのだが。

「そういや、ユーライジアの代表って誰なんだろな？　少なくとも、オレじゃないと思うけど」
「え、そうなの？　そっかぁ……」

もしそうであるのなら、とっくにカムラル老あたりからその話を聞かされているはずだった。
そうでないということは、他の三家の誰か、なのだろう。

その辺も、マイカに聞けば分かるかもしれないけれど。
思った以上に落胆している様子のナナが、少し気になったカズである。

「……どうかしたのか？」

「ううん。カズちゃんが代表さんならもしかして、アーヴァインの代表のひとが誰か知ってるかなておもたの」

三つの国の中で、ユーライジアから一番遠く、
大きな山を越えた先にあるという魔精霊の楽園、アーヴァイン。

カズは、知識としては知ってはいたが、ユーライジアと虹泉で繋がっていないのもあり、
詳しいことは知らなかった。

「そっか、悪いな。オレ、ユーライジアの代表者も誰だか知らないからなぁ。
というか、オレの耳に入ってこないってことは、まだ決めてもいない可能性もあるけど……
その、アーヴァインの代表者が、どうかしたのか？」
「あ、うん。その……もしかしたら、ボクが小さいころ、
助けてくれた王子さまかもしれなくて……だたらうれしいから」

カズの問いに、はにかんだように答えるナナ。
しかし、すぐにまじめな顔になって。

「だけどね、ボク、もともと身体弱いんだ。でも、代表者になれる子供はボクしかいなくて……
ほんとは今、お城のベッドから動けないんだけど、その、王子さまにどしても会いたかたの」

だから、幽体離脱などという高度な魔法を使ってまで、ナナはここにいる。

つまりはそういうことらしい。
ナナしかサントスールの代表がいないのなら、
国としての体面、というのもあったのかもしれないが。
それでも、こうしてここにいるナナをすごいと、カズは思った。

「……あ、このことじゃしか知らない秘密だたのに、言っちゃた。でもいーか。カズちゃんになら」　「そ、そうなのか？」
そう言われると、照れくさいやら何やらのカズではあったが、
言われて悪い気もしないのも確かである。
そんなナナに、何かしてやれることはないものか、カズはそう考えて。

「あ、そうだ。ナナはそいつの見た目とか名前とか、知らないのか？」
「えとね……名前は聞けなかったんだ。でも、すごくかこよかたの覚えてるよ」
ある意味子供らしいナナのそんな言葉に、それじゃあ何も分からないのと同じだと思いつつも。
なんでそいつはかっこよくて、オレはキレイ、なのかと、一瞬へこたれそうになるカズであったが。
そこでカズに、ナナのためにもなって、自分の仕事もこなせる、

いい案が浮かび上がった。

「そうだ、よし。この『キャメーラ』でナナの姿をとればいいんだ。

その王子さまってのは、ナナのこと知ってるんだろ？」

「うん、たぶん……」

ナナはそれにはちょっと自信なさそうにしていたが。

「オレさ、これから他の国のひとたちと会うつもりだからさ、ナナのうつってる『絵』を持って、その王子さまってやつ、さがしてやるよ」

そんなナナを励ますように、カズは僅かばかりの胸を張ってそう言った。

「ほんと！　ありがとう、カズちゃん！」

「あでででっ、だーからそれはやめろって！」

無拍子のサバ折りに、カズは半泣きでそう訴える。

「あは、ごめんね、カズちゃん。ボク、女の子のお友達てはじめてだから、加減わかんないんだよー」

「……お前、さっきまでの話、聞いてなかったろ」

条件反射でぶすくれるカズであったが。

その時のナナの笑顔は。
そんなカズでさえ嬉しくなってくるくらいに嬉しそうだったのが印象的で……。

（第18話につづく）

18、Tender green

そうして。
首尾よくカズはナナが写った『絵』と、ナナと自分が一緒に写った『絵』を手に入れて。

ほくほくなまま、校舎の中、客人用の宿泊施設のあるところまでやってきていた。

抜き足差し足で闇の中、廊下を歩くのにも慣れ、
しばらくすると、誰かがそこにいるのか、明かりの漏れ出す一室を発見する。

カズはその、暗い廊下に光を落とす硝子窓から中を覗きこんでみる。
見た感じ人の姿はないように見えたが。

（マイカ、近くにいるな……）

バレバレなんだよ、とでも言いたげに、カズはほくそ笑む。
何しろ彼女は、スクールの『理事長』というおそらくはカムラル老よりも偉い肩書きを持っているだけあるのか、存在感というか、潜在魔力が半端じゃないのだ。

マイカ・エクゼリオ……闇の根源魔精霊と同じ名前だけあり、

近くにいればその強い闇の魔力を、すぐさま感じ取ることが、カズにはできた。

扉の取っ手に手を伸ばすと、鍵はかかっていないようで。
隠れて、脅かすつもりなのかもしれない。

よし、のってやるか、とばかりにカズは、音を立てずにこっそりと部屋に入る。

そこは、一人部屋ではあるが、スクールに内設されている客室の中では最上級に類する一室だった。
マイカの、カズにとって比較的好きな部類に入る闇の気配は。
部屋備え付けの、バルコニーのほうから漂ってくるのがわかる。

カズは、迷うことなくそっちの方へ一歩踏み出して。

チャキッ。
僅かな鍔鳴り音のような、金属の軋む音と、襲い来る背後からのぞっとする心地に、
そのまま動けなくなってしまった。

「動くな。動けばその魂、刈られると思え」

まだ幼い声色ではあるが、しっかりと凄味のきいた少年の声がする。
まさかマイカではない第三者が潜んでいるとは夢にも思わないカズである。

というか、マイカの力に紛れたせいなのか、カズに気取られないくらい気配を消すがうまいのか、
その少年の存在に、カズは直前まで気付くことはできなかった。

首筋近くに添えられているのは、湾曲する刃のようだった。
その言葉の通り、それはおそらく、魂を刈るために作られた所謂『死神の鎌』であろう。

産毛が逆立ち、冷たいものが背中に落ちる。
なるほど、カズの細く頼りない首など、容易く刈ってしまえるだろう圧迫感が、そこにあった。

「ははっ」

カズは、そのベタベタな危機状況に、思わず笑みをこぼしてしまう。
恐怖から来る部分も全く無かったと言えば嘘になるが。
危険な場所に潜入して危機に陥る、なんて、ある意味憧れていた……
言い方はあれだが、カズが求めていたものが、そこにあったから

なのかもしれない。

「……中々の度胸ではないか。今の状況、分かっていないわけではあるまい」

どこか、勝気で自信満々で、それでいてちょっと高圧的な、そんな言葉。

「あるまいって、ガキのくせにおもしれーしゃべり方だな、お前」

喋り方がこまっしゃくれて面白くて、カズは余計に笑みをこぼしてしまう。

「お前こそ、全く持って不釣合いな、興味深い喋り方をするではないか。

はっ、まさか、お前もそんななりで、『男』だ、なんて言うのではあるまいな！」

「……だったら、どうした？」

カズにしてみれば、すごく、すごーく引っかかる言い方ではあったが。

いきなり初対面で『男』だと認められたのは始めてに近かったので、

ちょっと気分のよくなるカズである。

だが、それからすぐに羽交い絞めにあった状態、

その頭上で、今まで感じたことのない魔力、魔法が発動する気配

を感じ取り、カズは硬直した。

マイカとグルだと思って強気だったが、そうじゃなかったのかと。
前方は刃に包まれてて逃げ場はないし、実はほんとに命の危機なのかと、カズは内心焦ったが。

「ほっ、良かった。……本気で人生嫌になるところだったぞ」

なんてわけの分からない、妙に安堵したような声がかかり、カズは突然解放された。

「ふむ……お前、名をなんと言う」

振り向いた先にいたそいつは、言うなれば全身緑、だった。
髪も、瞳も、服装さえも。

いかにも王子、といった風合いだったが、思っていたよりも嫌味を感じさせない雰囲気がある。

「名乗るときは聞いたほうが先、って言いたいとこだけど、めんどくさいから名乗ってやろう。
オレはカズ。カズ・カムラルだ。……お前は？」
「ケイ。ケイ・ガイアットだ。先程はすまないことをした。
これでも一国の王子、何かと狙われやすい性質なものでね」

年のころは同じくらいだろうか。
この年で、常に誰かに狙われるかもしれない、なんて普段から考えているとは、
大変なんだなぁとしみじみ思うカズである。

ガイアットは、そういったイザコザが多い国らしいし、
そう言う意味でも自分は恵まれているのだろうと。

「あ、そう言えば、さっきの魔法、なんだったんだ？」
「あ、ああ。【魂見（ソウル・シーカー）】と言ってね。
かけたものがオレ様に対し、害あるものなのかどうか……なんてことを知ることができるのだ」
「ふーん。……で、オレはどうだったわけ？」

カズはからかうように見上げて（やっぱりケイも、カズより背が高かった）そう言うと。
ケイはおそらく同じような顔をして。

「……少なくとも、オレ様の命を狙う女密偵、じゃないことは分かったよ」
言葉通り、からかいをからかいで返すような、それでいれ何故か不快と感じさせない態度で、
そんな事を言う。

喋り方といい性格といい、面白い奴だ。
お互いの最初の印象は、そんなところだったのかもしれない。

それが、一生ものの長い付き合いになることなど、やはりお互いに知る由もなかったが。

（第１９話につづく）

19、Complete Darkness

……と。

「あれ、誰かと思ったら、やっぱりカズだった～。こんなとこでこんな時間になにしてる？　よばい？」

唐突に声がかかり、返事する間もなく目に痛いほど桃色のフリルつきドレスを着た、

ブロンドボブの女の子が無遠慮に割って入ってくる。

深い色合いを出す瞳はエメラルド。

そこには……見た目の幼さとは裏腹に、長年生きてきたものだけが見出せるような陰影があった。

その少女の名は、マイカ・エクゼリオ。

このスクールの最高責任者であり、これでもカズの十倍は軽く生きている、らしい。

マイカの言では、人間だったらカズと同じくらいだよ、とのことだが……。

なんと言うか、いろいろな意味で何かを超越したお人であった。

「よくわかんねーけど、違うとだけ言っとくよ、マイカ」

「また、またぁ。頭でっかちのおませさんのくせにー」

「言ってろよ……」

「ぬおっ？　よ、呼び捨て？　カズ……ってもしかして、マイカ様の知り合いなのか？」

いつものお決まりのやり取りを二人でしていると。
ケイが目を白黒させて、そう聞いてくる。

カズに対しても、ひょっとして失礼な口を聞いてしまったのでは、
といった反応をしているケイであるが、そうなってしまうのも、
仕方のない事なのかもしれない。

カズだって、カムラル老より目上で年上の者に対し、
同年の友人のような扱いをするのはいかがなものかと自分で思ったりするのだが。
マイカ本人がそのほうがいいと言うのだから、仕方がなかった。

「知り合いって言うか、友達？　そう言っちゃっていいのかよく分からんけど」
「あたしとカズは『らぶらぶ』、なんだよ～」
「そ、そうなのですか……」

二人のやり取りに、ケイの呆けたような呟き。
その様子だと、大層混乱してるんだろうなとカズは思ったが。
意外にも早く復帰して、ケイはカズに向き直る。

「カズ・カムラル……カムラル、そうか。ユーライジア四王家の。
だが、だったらどうしてこのような時間に、しかも、密偵のよう

な真似をして」
「あ、だからそれはあたしも知りたいよ？　何かあったの？」
そう思うのもっともなのだろう。
カズはこれで本題に入れるな、とばかりに、ここに来た理由を話すことにした。
マイカには元々話すつもりだったし、ケイはそもそもカズがここに来た目的の人物だといっていいだろうからだ。
そんなわけで。
カズが、ナナの時と同じように、今回の仕事のことを説明すると。
「ふーん。おもしろいね～。いいんじゃないの？」
「オレ様も、かまわないぞ」
二人は快く頷いてくれて。
カズは既に慣れた手つきで、自分やマイカは別に必要ないことも忘れ、
三人で写ったものをとったり、二人で組み合わせを変えたり、
一人でとったり、何枚も何枚もとっていく。
思ったより調子に乗ってしまったのは。
ケイがマイカやカズをさりげなく、それでいて自然と盛り立てているせいもあったのかもしれない。
そんな風にしばらくとり続け、このくらいあればいいかな、なんてカズが思っていると。

「ねぇカズ。よかったらさー、これからしばらくケイたちの遊び相手になってくれない？」
「うん？　ああ、いいけど」

ふいに思いついたように、マイカがそんな事を言ってくる。
それは、ケイだけでなく他の国から来た代表者の子供たちも含めてのことだろう。

カズは、あわよくばそのつもりでもいたから、それにはただ頷いて返す。

「マイカ様……すると、父上は？」
「あ、うん。いったん帰ってもらうことにしたよ。
しばらくあたしたちで面倒見るって言っておいたから。
それで、ユーライジアの土地に慣れるためにも、案内役が必要でしょ？　カズなら適任だろうからね」

ケイの問いに珍しく、まじめな口調でマイカがそんな事を言う。
実の所……現在、お互いの国同士、険悪というほどでないが、仲がいいとも言えない状態なのは、カズも知っていた。

これは、その緩和の措置なのだろうと、カズはなんとなく考える。

「それじゃ、みんな連れてどこかへ遊びにいってもいいってこと？」
「うん、すぐってわけじゃないけど。ケイたちにはしばらくここ

にいてもらうことになると思うから……どっかいいとこ、ある？」
「……そうだな。やっぱり、ライジアパークだろ。今さ、世界のマジックアイテム展、やってるんだ。確か、一番の目玉は……マジックアイテムで作った動く世界地図、だったか」
「さすがカズ。これなら任せてもよさそうだね」

カズが思いつくままに楽しめそうな遊び場をあげると、マイカは感心したように手を叩く。
しかし、ケイは思ったより反応が薄いようだった。

まぁ、それはそうかもしれない。
今のは、カズが行きたいところ、なわけなのだから。

「あとは……大迷宮とか……あっ、そうだ。『サーカス』！
南方から魔法と魔精霊のサーカスが来るって言ってたな」
「サーカスか！　いいな、それ」

窺いながらカズがライジアパークの出し物をあげていくと。
お気に召すものがあったらしく、ケイの顔が興味津々なものに変わるのがわかった。

「じゃ、サーカス見に行くぞ、約束だ」
「あぁ、よろしく頼むぞ」

ちょっと偉そうにそう言うケイ。
カズはそれに苦笑しつつも、それにしっかりと頷くのだった……。

（第２０話につづく）

20、拝啓，王子様☆

その後。
カズは、最後の一国……アーヴァインの国の人たちに会うために、
マイカからもらったカンテラを持って歩いていた。

マイカは初め、ついてくるつもりだったようだが。
外に出ていられる時間がもうないとのことなので、カズは丁重に
お断りした。

ケイには、こんな時間に出歩くなど王族のすることではない、な
んてカズをからかっていたけれど。
カズにはナナのためにアーヴァインの代表者を確認する必要があ
ったし、
どうせなら他の三国全ての人たちに会って、仕事を全うしたい、
というのもあった。

ただ、クマのような男女に気をつけろ、
なんてマイカの冗談半分の言葉が気になるといえば気になったが
……。

カズはそれから迷うこともなく、再び明かりの漏れた、別の部屋

の前へとやってきた。
今まではお忍びだったが、もはや公認みたいなものなので、気分的に楽なのもあっただろう。
カズは、その光の漏れる扉をを叩こうとして。

「お母さん、遅いよ〜。……って、だ、誰？」
いきなり扉が開いて、びくりとなるカズであったが、驚いたのは向こうも同じだったらしい。
細かなウェーブのかかる、長い長い黒髪。
曇りのない黒一色の大きな瞳の中には戸惑い、そして、多少の恐怖も含まれているかもしれない。
というより、出会い頭でいきなり泣きそうだった。

「お母さんじゃなくて悪かったな。オレはカズ、カズ・カムラルだ。お前はアーヴァインの……」
王子か？　と聞こうとして、カズは息をのむ。
おそらく、カズと同じくらいの年頃なのだろうが。
そこにいるのはどう見ても女の子としか言いようがなかったからだ。
この頃の年代の子供は、えてして中世的であると言えばそうだろうが。

そんな見た目よりその態度とか仕草とか、女の子らしいといったほうが、
しっくり来るような気がする。
だが、だったら別に言いよどむことはないはずなのだ。
なのに、どこかひっかかる。
なんだか似たもの同士を見ているかのような、そんな気分になってくるカズである。

「あ、ぼ、僕は……ダイス・アーヴァイン、です……」
礼儀をわきまえているのか、突然やってきたカズに対し、怯えながらもきちんと挨拶をしてくる。
なのに、一度似たもの同士、なんて思ってしまったせいなのか。
そんなおどおどした態度が、なんだかしゃくにさわるカズである。
とはいえ、勝手にやってきたのは確かなので。
そりゃ戸惑うこともあるだろうって納得し、カズは言葉を続ける。

「ダイスって言ったよな。お前、今度の建国祭の代表者か？」
「あ、はい。そうですけど……」
「んじゃ、この子のこと、知ってるか？」
「えぇと……うーん、ごめんなさい。知らないです」
早速本題に入ってみたカズであったが、期待空しくダイスは首をふる。

「あのさ。ちょっと聞きたいんだけど、アーヴァインの王子で、この子にあったヤツいると思うんだよね。ナナっていうんだけど」

この際、ダイスが男だろうが女だろうが二の次だった。

ナナの言っていた王子さまは、祭りの代表者じゃないのは残念だったけど、

代表者に選ばれたダイス自身だって、それなりの地位なのは間違いないだろうから、

ダイスの兄か弟か、ナナを知っているやつが分かればいい、

なんて考えてのカズの言葉だったのだが。

「アーヴァインの王子？　ええと、その、あの……それって、僕のことかな？」

「え？　だって、ナナのこと知らないんだろ？　お前、兄弟とかいないのか？」

「はい、いませんけど……」

どう見ても王子には見えない、なんて心情は自身の首を絞めかねないので。

カズは心のうちで留めておくことにして。

つまりどういうことなのかと、考える。

ナナは確かにアーヴァインの王子と言っていたけれど、ダイスは覚えがないという。

ナナが勘違いをしていたのか、それともダイスが忘れてしまっているだけなのか。

ただ、ナナ自身も、名前も顔も覚えてないのだから……

ダイスだって忘れている可能性のほうが大きいのかもしれない。

これは、直接会って話したほうが早いんじゃないのかって、
至極当然な答えに行き着くカズ。

それでもまあ、その事をだしにしてナナにも『キャメーラ』を使わせてもらっていたし、
こうなったらダイスにもお願いしておくか……なんて思い立つちゃっかりなカズである。

「そっか、じゃあ仕方ないな。それよりさ、ダイスにお願いがあるんだけど、入ってもいいか？」

ただ、キャメーラは、光の少ないところだと、うまく効力を発揮しないというのをカワダから聞かされていたので、目的を達成するためにはまず、明るい部屋に入れてもらうことが必要だったのだが。

「あ、ええと……それは」
ダイスはどこか戸惑うように、曖昧な言葉を口にする。

「何だ？　だめなのか？」
「あ、いや、駄目っていうか……その」

ダメならダメでしょうがないというわけでもないが、はっきりしない、
煮え切らないダイスのそんな態度に、なんだか腹がたってくるカズである。

「その……あの、こんな遅い時間に余所様のお嬢さんを部屋に入れるわけにはいかないから」
「それをお前が言うなぁ！　オレは男だっつーのっ！」
いかにも、紳士な大人が言いそうな台詞を、世界一似合わない自称王子が呟いたのを見て。
同属嫌悪ってやつだろうか。
そんな良く分からない感情に押されるままに、カズは思わず声をあげてしまった。
今までは、こんな風にたくさんの人と出会うなんてことがあまりなかったから気付かなかったが。
これから自分は、会う人会う人に、ずっと同じことを主張していかなければならないのかと思うと、何だかやり切れないカズである。
かといって、カムラル老の望み通りに、抵抗せずこのまま流されていくのも嫌だったのだ。

「うわわっ？　って、きみ、男の子だったの？　え、何で……？」
嘘だろうというよりも、何を世迷言を言っているんだといった雰囲気が、
ダイスの口ぶりから伝わってくる。
「てっ、てめーだけには言われたかねーぞっ、こにゃろーっ！」
「わっ、わぁっ」

カズはダイスに組み付き、襟元を掴みあげて揺さぶろうとする。
ダイスは情けない声すらあげているが、カズの力がないのかダイスの力が強いのか、
頭一つ分しか違わないダイスはびくともしなかった。

端から見れば、カズがダイスにじゃれているようにしか見えないだろう。

「……」
事実、その様を見ていたダイスの相棒にして忠実なる従属魔精霊は。
それを見て主が襲われている、とは思わなかった。

むしろ、何だか楽しそうだから自分も仲間に入れて欲しい、なんて思ったくらいで。

カズが、その存在に気付いた時にはもう、それはカズの足元までやってきていて……。

（第２１話につづく）

21、Mother Rhythm

「……っ！」
瞬間、カズを襲ったのは総毛立つ嫌な予感。
まるで、マーサーの歌を至近距離で聴いてしまったかのようなゾクゾク感がする。

しかし、その存在に気付いた時にはもう、それはカズの足元までやってきていた。

ぎょっとなってカズが視線を下に向けると。
そこには青銀色の毛並みが柔らかそうで美しい、
筒みたいに細長い体をした、鼬のような小動物がいた。

いや、それはただの動物ではない。
全身から微弱に放たれる『光（セザール）』の魔力。

カズは、すぐにそれが希少だと言われている光の魔精霊……
しかも、ご多分に漏れず相当高位な存在であることが分かった。

「まっ、まさか、ユーミール・ヴァンクル？」

気位が高く、人の前に滅多に姿を見せない魔精霊。
それが、こんな所にいるなんて信じられないが。
それより何より、カズは『光（セザール）』の根源に類するもの全てが、

何度も言うが、大の苦手だった。
もともと大好き、というわけではなかったのだが。
それがマーサーとであって最近とみに強くなっていて。

その、内心のカズの怯えを、それは感じ取ったのかもしれない。
琥珀色の瞳で、じっとカズを見上げたかと思うと。
気のせいだと思いたいカズの心の内を見透かすように、ニヤリと笑みを浮かべているのが分かって。

「……っ」
それに……カズが思わず息を呑んだ瞬間。
まるで木に這い上がるヘビのごとく、それは長い体を生かしてカズの取り付き、
ぐるぐる回りながら肩越しにまで上がってきた。
そして、カズにぎりぎり見える位置でがぱっと口を開けて……。

「ひゃぅっ？　ちょ、やめろっ、う、うわあああああーっ！」
べろん、と、身体の割りに大きな舌がカズのほほを撫で上げたからたまらない。
「……はふん」

力尽き、気の抜けた声を漏らし、ばったりと倒れるカズ。

「ああっ、ナオっ！　何してるのっ」

その後に、ダイスの慌てたようなそんな声が聞こえたような気がしたが。

その時にはまたしても、カズの意識はそこにはなくて……。

「何でもかんでも拾ってくるんじゃないって、いつもいってるだろ」

「ち、違うよ、お母さん。カズは自分でやってきたんだって」

「お前、ナオの時だって同じこと言っていたじゃないか」

「だから、そうじゃないんだってば～」

とても野太い、頼りがいのありそうな声と、ダイスが困った様子で会話をしている。

何だか、その微妙に不穏当な感のある会話に、カズは何とか埋もれていた意識を引っ張り上げ、目を覚ました。

すると、目の前すぐのところに、青白い小動物の顔があって。

「う？　うあああっ、く、くわれるっ、た、たすけてーっ！」
我ながら情けないなと思うカズではあったが、すでに心のダメージと化しているようで、勝手にそんな声が出た。

「ナオ。カズが怖がってるから、こっちにおいで」

すぐ近くから、ダイスのそんな声。
すると、どうやら仰向けにベッドに寝かされていたカズの胸元に陣取っていたらしい、
ナオと呼ばれた光の魔精霊は、ちょっとだけ残念そうに鳴いた後、言われたとおりダイスの元へと駆けていき、その頭の上でうずくまる。

やはりナオは、ダイスの従属魔精霊のようだ。
契約してなければ、あそこまで人の命令を聞き、懐くなんてことはないだろう。

カズ自身、周りに結構そう言うやつが多かったりするのであまり実感がなかったりするのだが、
逆に言えば、カズと同じくらいの年頃で、すでに高位の魔精霊と契約しているすごいヤツ、ということになる。
さすがに祭りの代表者に選ばれただけはあるなぁと、カズが妙に感心していると。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん。息子たちが迷惑かけたねぇ」

「……っ！　あ、い、いえ」

マイカがクマみたい、と言っていたのはこの人のことなのだろう。
やや気圧されつつも、野太くて暖かい声のほうへ身体を起こし、向き直ると。

そこには……カズの何十倍の体格はあるんじゃないかって思えるくらいに威圧感のある、
鍛えられた筋骨隆々の身体を持つ、大柄な女性がいた。

ダイスのことを息子と言っていたのだから、この人がダイスの母親なのだろう。
まるで似ても似つかないが、細かいウェーブのかかった長い髪が、それでも二人が親子なんだろうなってことを連想させる。

「え、えっと……あなたがダイスのお母さんですか？
えっとあっと、オレ、カズ・カムラルっていいます。
マイカ……じゃなかった、理事長から話、聞いてませんか？」

お嬢ちゃん呼ばわりされていることを訂正する余裕もなく。
カズにはもともと不法侵入している自覚もあったりしたので、直感的になんか怒られる！
なんて思ってしまい、あたふたしながら自分がここにいる理由を主張しようと試みる。

よく考えれば、カズがマイカに他国の王族の子供たちのお世話係

に任命されたのは、
ついさっきだったわけで、目の前の女性がそれを知りうるはずはないわけなのだが。
それでも、何かしら話が通っていたのか、ああ、とひとつ頷いてくれて。

「ああ、あんたがアリスの子か！　そうかそうか。……マイカ様からは話を聞いているよ。
アタイはミリカ。見ての通り、こいつの母親さ。ふーん。そうかいそうかい。
マイカ様の言った通りだねぇ。ほんとにアスカ様によく似てる」

しみじみと懐かしそうに、ミリカと名乗った女性はつぶやいた。

「お母さんとばあちゃんのこと、知ってるんですか？」

カズは、会ったこともなかったけれど、その名前はよくカムラル老から聞かされていた。
カズは、祖母、カムラル老にとって妻である女性によく似ていると。

その女性、アスカ・カムラルは、健在であった頃、みんなをまとめるとても偉い人だったらしい。
カズが、マイカのことを呼び捨てなのは、カズにアスカの面影があったから、というのもあるのだろう。

だが、マイカもカムラル老も、二人のことをあまり話したがらなかった。
特に、母親であるアリスのこと、父親のことは、ほとんどと言ってほどに教えてもらえなかったのだ。

と言うより……『虹泉の迷い子』であったカズには、
本当はそんな人たちはいないんじゃないかって、そう思っていたくらいである。

この人なら、何か知っていて……もしかしたら教えてくれるかもしれない。
だからカズがそう聞くと。

「ああ、よく知ってるさ。特にアリスはね、あたしの永遠の好敵手だったから、
若い頃はよくやりあったものさ。まだ、その時の傷が残ってるくらいだよ」

そう言って、豪快に見せてくれる、肩から背中にかけての火傷の跡。
この人とやりあえる母親って、一体どんな人だったのだろう。

家にある肖像画で、なんとなく分かったつもりでいたが。
これは思っていたより大分想像と違う人、だったのかもしれない……なんてことをカズは思う。

「これも何かの運命なのかねぇ。あんたがこいつのよき相手になってくれれば、これほど嬉しいことはないねぇ。そう、拳で語り合ったりなんかして」
「お、お母さん」
「……ははは」

カズの頭ほどもある拳で構えて見せながら、やっぱり懐かしむように、そんな事を言うミリカ。
ダイスは当然のようにおどおどと戸惑っていて。
そんなダイスと視線のあったカズは、苦笑で返すしかない。

どう客観的に見ても、目の前の女の子みたいなこいつと殴り合いなんてありえない。
たぶん、お互いにそんな事を思っていて……。

でも、そんな風に一緒につるんでいくのは何だか悪くない気もするカズである。
それに、もともとマイカにお世話係頼まれていたし、似たようなもの？　だろうと。

だからカズは、マイカに頼まれたこと、『キャメーラ』のことを含めて、
そんなミリカの言葉に肯定の意味で、一通り事情を説明した。

「そうかそうか。あんたがこいつの面倒見てくれるってかい。
マイカ様にこの子を置いていけって言われたときはちょっと心配だったけど、
これなら安心できるってものだよ。……よかったな、ダイス」
「はい。カズ面白いし、良い人みたいですから」
「おいおい、いきなり買いかぶりすぎだって。……って、ここっちくるなっ！」

ミリカとダイスの言葉に思わず照れるカズ。
するとそこに、ぱっと跳躍してナオが飛びついてくる。

カズは、二度と食らうものかと、ナオから必死に逃げ回った。
どうやら、怯える様も面白いらしく、たいそう気に入られてしまったらしい。

「ははは、この気難しやがこんなに懐くとは、さすがアリスの子だ、
魔性の女と書いて魔女ってやつかねぇ」

カズがミリカの背に隠れると、ミリカは楽しげに豪快に笑い、
この大きな手で簡単にナオを捕まえてしまう。

最初はむずがっていたナオだったが、その大きな手の中が心地いいのか、
すぐに大人しくなり、ついには寝てしまった。

ミリカが言うには、ナオは人を識(み)るらしいとのことで。
こいつがこうやって懐くってことは、よっぽどなんだよ、と、や

っぱり豪快に笑うミリカ。

だから買いかぶりなんかじゃないと、そう言いたいのだろうが。

「んじゃ、キャメーラのほうも、お願いしていいかな？」

カズは、そんな風に言って、誤魔化し笑いを浮かべることしかできなかった。

そうやって持ち上げることがくすぐったい、ということもあったのかもしれないけれど。

初めて感じる、カズの知らない母と言う存在に。

どこか戸惑っていたせいも、あったのかもしれない……。

（第２２話につづく）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8669w/

夜を駆ける～Ｈｅｌｌｏ ｍｙ ｆriend～

2011年10月9日19時31分発行